offer vol.23

CONTENTS

COVER

時代の変化は加速しつづける。そのスピードに対応できなければ、生き残ることも難しい。今日、人気を呼ぶモノが、明日には見向きもされないことも起こりうる。デザインに関わるものは、常に、一歩先をサーチする、新しい視点で変化に立ち向かわなければならない。それは、あらゆる変化を読み取りチャンスへと変換させる機能を、デザインが背負っているからだ。

撮影／谷中健一（タニナカフォトスタジオ）

PROFILE

中山 真由美
nakayama mayumi
アートディレクター
グラフィックデザイナー

㈲FINE PROJECT所属、㈳日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）会員、㈳富山県デザイン協会会員、TOYAMA ADC会員

［賞歴］「ジャパンポスターデザイングランプリ'99」グランプリ／「第6回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2000」入選／「TOYAMA ADC 2000」グランプリ受賞・会員審査賞受賞／「ラハチ（フィンランド）ポスタービエンナーレ2001」入選／「平成15年度 日本観光ポスターコンクール」入賞／「TOYAMA ADC 2003」福島 治・片岸昭二ベストチョイス賞・会員審査賞受賞／「東京タイポグラフィ年鑑 2003」入選、「東京ADC年鑑 2003」入選

写真／Nacasa&Partners Inc.

写真／Nacasa&Partners Inc.

上／1階のカフェレストラン天井に設置されたシャンデリア。サイズの違う円形状のシェードはスチールの枠組みにスズの平板が巻かれている。スズは従来、加工性を増すため亜鉛を入れて合金とするが、今回は光沢や素材感を生かすためスズ100%にした。
下／能作が手掛けた真鍮製のスタンド照明。1階のロビーに設置されている。精度の高い鋳造技術によって真鍮の素材感が生かされている。

カフェレストランが広がる1階。フロントのカウンターボードにはHiHillが製作した漆の手板のパターンを採用した。

写真／Nacasa&Partners Inc.

漆と金属のプロ集団 "HiHill" の技術が東京のリノベーションホテルに採用。

昨年9月、東京目黒にオープンしたホテル「クラスカ」の家具や照明器具に、高岡の漆器や金属加工メーカーが立ち上げたブランド「HiHill（ハイヒル）」の伝統技術が生かされた。

「クラスカ」は2002年5月まで営業していた築35年のビジネスホテルを「どう暮らすか」というコンセプトのもと、様々な分野のクリエーターが参加し、デザインの力でリニューアルしたホテル。1階はロビーやカフェレストラン、ブックストア、ドックトリミングサロン、2階はギャラリースペース、3階は賃貸オフィス、4～5階は全室間取りが異なる客室、そして6～8階はカスタマイズ可能な長期滞在型レジデンシャルホテルになっており、今までになかったスタイルのホテルを提案。インテリアショップが多く建ち並ぶ目黒通りの新しいランドマークとして注目されている。

「HiHill」がこのホテルのインテリアを製作することになったのは、ホテルの家具ディレクションを担当した立川裕大さんの紹介による。立川さんは平成12年、高岡市デザイン・工芸センターの事業としてスタートした銅器と漆器の商品開発研究会（10社3団体で構成・平成15年21社で有限会社HiHillとして法人化）のデザインアドバイザーとして関わってきた経緯がある。

「高岡の漆器メーカーや鋳造工場を視察する度、その技術や素材の質の高さに驚きました。しかしモノをつくるという資産はあっても、それをうまく運用するソフトがない。どう生かしていいのか見出せないでいる状態。一方、都心で仕事をしている設計者やデザイナーには、産地に足を伸ばして現場を見ている人が少ない。そこで、HiHillの技術をクラスカのデザインでアウトプットしてみようと提案しました。今回の私の立場はHiHillのもつ素材と技術を、付加価値の高いデザインに結び付けた媒体のようなものですね」と立川さん。

今回、「HiHill」が手掛けたインテリアはフロントの漆塗りカウンターボード、ロビーや客室のスタンド照明、レストランのシャンデリアなど。すべて「インテンショナリーズ」という建築デザイン事務所がこのホテルのためにデザインし、職人たちが形にしていくというオーダーメイドだった。金属加工製品に関しては銅器メーカーの能作が担当した。スタンド照明はシェード、ベースともに真鍮製で五層のシェードを組み上げ、その中に光源を仕込むという複雑な構造。限られた納期と予算の中、幾度もの変更が発生する作業となったが、職人にとって、対話を重ねながら様々な問題を解決していく工程は、市場に目を向け、モノづくりに対する柔軟性を高める機会になったという。

「HiHillの技術力はレベルが高く、価格も適正。国内の産地と比べても十分な競争力があると思います。これからもこうしたプロデュースを通してブランド力を高めていけたらと思っています」と立川さん。

立川さんはクラスカ8階に構えるオフィスにHiHillの東京連絡事務所を併設。今後も優れた素材や技術の運用に取り組んでいきたいと考えている。

デザインディレクターの立川裕大さん

写真／Nacasa&Partners Inc.

クラスカの外観。老朽化したビジネスホテルをデザインの力でリノベーションした

●t.c.k.w代表 立川裕大　☎03-5725-2605
E-mail tokyo@tckw.jp
●㈲HiHill　http://hihill.media-pro.co.jp/

富山コンペの常連、澄川さんが東京でデザイン展を開催。

総合デザインセンターが実施する富山プロダクトデザインコンペティションに毎回優れた作品を提案、受賞歴も多いプロダクトデザイナーの澄川伸一さんが、昨年11月21日から5日間、東京のAXIS GALLERYでデザイン展「精緻の一滴」を開催。大きな反響を得た。
テーマは水。波紋やうねり、水滴、渦、つらら、潮の満ち引きなど、水の多彩な表情と魅力に影響を受けた澄川さんの20年間の歩みを振り返る展示となり、大型浴槽や輸液ポンプ、水中カメラ、防水ウォークマンなど、用途の異なるプロダクト作品が水という共通テーマのなかで一つのコラージュ的な世界を作り出した。
展示作品の中には、95年の富山プロダクトデザインコンペでデザイン優秀賞を受賞し、昨年秋、ようやく商品化されたピルケース「pecon!」をはじめ、㈱竹中製作所（高岡市）が協力したアルミの日用品「AQAURIUM」シリーズ、天野漆器㈱（高岡市）が協力した波紋のお盆など、全体の4分の1が富山県企業が関与した作品となった。
澄川さんは「今回、改めて展覧会を振り返ってみて、水と同時に富山に関係したワークが多かったことも再認識しました。今後も質の高い技術をもつ富山県のメーカーとのコラボレーションを続け、10年後の個展を目指して頑張っていきたいと思います」と語った。

●澄川伸一デザイン事務所
☎0424-88-3803

イタリアのモノづくりを学ぶミラノデザインミッションを実施。

総合デザインセンターは、日本貿易振興機構（ジェトロ）のローカル・トゥー・ローカル産業交流事業の一環として、イタリア・ミラノのデザイン開発やビジネス戦略を学び、富山のモノづくりを活性化することを目的としたミラノデザインミッションを昨年10月2日〜10日の9日間派遣。県内企業の経営者やデザイナー、県の行政関係者など14名が参加した。
イタリアではイカミ社、カルテル社、トレビー&トレビュー社等のデザイン先進企業の視察やミラノ市内のデザインショップを調査。また、ミラノ在住デザイナーと県内のモノづくり技術のコラボレーションによる商品化を目的とした『富山・ミラノデザインコンペティション』の実施や蓮池槙郎さんやステファノ・ジョバンンノーニさんをはじめとする現地デザイナー約40名との交流会も開催するなど精力的な活動を展開した。
イタリアの中小企業は、大手の下請けに頼らず、ニッチ戦略と独自の企画力で高い競争力を得ている。また、生産部門の専門化・分業化によって生産拠点を維持するなど、革新的な経営システムも見られ、県内の中小企業が見習うべき点が多く見られた。
参加者は、このミッションで得た様々な情報やインテリアデザイナーからのデザイン提案を県内企業の活性化のヒントとし、今後の展開に生かしていきたいと考えている。

●富山県総合デザインセンター
☎0766-62-0510
http://www.toyamadesign.jp/

暮らしのなかに生きるデザイン、工芸都市高岡クラフトコンペ開催。

グランプリ「unity」

金賞「どん」

銀賞「Luxury Bowl・Lightful Bowl」

ライフスタイルの変化や価値観の多様化をふまえ、新しい産業工芸の育成を目的に、毎年開催している「工芸都市高岡クラフトコンペ」。2003年度は38都道府県から2,346点の応募があり、9月4、5日に行われた審査会ではインテリアデザイナーの内田繁さんをはじめ、6名が審査にあたった。
グランプリは松野章弘さんの陶磁「unity」。「白の器が日常の器として蔓延化する時代にあって、改めて白の表現の奥深さを静かに、知的に表現してくれた秀逸な作品。白磁に陶土で白化粧を施し、線と色に要素を絞り込み、白に白の意匠を凝らしたことが新鮮で爽やかな印象を与えてくれる」と高く評価された。
金賞には笹浦裕一朗さんの漆器「どん」、銀賞には青木良太さんの抹茶椀「Luxury Bowl・Lightful Bowl」が選ばれ、入賞・入選作品を含め930点が10月23日〜28日、大和高岡店で展示された。会場には、全国のクラフトマンが感性と技術を生かし、丁寧に作り上げた家具や生活雑貨、アクセサリーなどが一堂に展示され、来場者たちはモノづくりの魅力、そしてデザインと機能を兼ね備えた「用の美」を実感していた。

●工芸都市高岡クラフトコンペ実行委員会
☎0766-23-5000

デザイントープコンペティションに竹中製作所が参加。

グランプリ「ウェーブ」

●㈱竹中製作所
☎0766-28-6266
http://www.take.co.jp/

建築家・デザイナーの黒川雅之さんが立ち上げたプロジェクト「デザイントープ」が毎年開催しているデザインコンペに、竹中製作所（高岡市）が課題提出企業として参加。新しい時代を切り拓くグッドデザインを募った。
3回目となる今年度のテーマは「ゲート&フェンス」。昨年11月までに世界10数カ国から74作品の応募があり、12月上旬に審査を実施。審査委員長の黒川さんと竹中製作所のほか、同社がOEM商品を供給している松下電工、四国化成工業、YKK APが審査員企業として参加し、グランプリ、準グランプリ、優秀賞5点を選出した。
グランプリは田崎佑樹さんの「ウェーブ」。ウェーブ状の粗密を生かしたステンレスメッシュのフェンスで、温かい表情が感じられるデザインが評価された。審査後、竹中製作所では審査委員企業3社とともに生産コストやマーケットシェア、流通など多方面から商品化を検討したが、今回は見送ることになった。
「今回は具体的な商品化は実現しませんでしたが、メーカーのニーズや市場動向を深く知る機会となりました。商品化を前提としたコンペなので、現実的な作品の応募が多かったのですが、メーカーが求めているのはむしろ斬新なコンセプトやイメージ。そこに若干のギャップがありました」と同社デザイン室。
同社ではこうした反省点もふまえ、課題の出し方を再検討し、来年度もコンペを実施したいと考えている。

高岡漆器の新プロジェクトが、東京デザイナーズウイークに出展。

高岡漆器青年会のメンバーが立ち上げたプロジェクトt[j]r（ティージェイアール）が、昨年10月9日〜13日、東京・お台場を主会場に開かれた東京デザイナーズウイーク「コンテナエキシビジョン」に漆器製品を出展。漆器の新しい可能性をアピールした。
t[j]rはtakaoka、英語で漆を表すjapan、洗練する人・改善する人を意味するrefinersの頭文字。高岡漆器の優れた技術と素材を現代のライフスタイルにあったデザインでリファインしていくことを目指し、デザイナーの佐藤康三さんがプロデュース、同青年会の有志で結成した。
展示スペースは7,000坪の空き地に並んだコンテナ74台のうちの1台。t[j]rでは、ぐい飲みやビアマグ、コースター、パーティトレイなど、料理や場所を選ばないシンプルな漆器約80点と、漆の多様な表現技術を示す塗見本の「手板」を展示し、職人の作業風景や高岡の観光地を紹介する映像も投影。他のコンテナを凌ぐ高い注目を集め、期間中、6,000人近い来場者を記録した。
「技術の集積地である高岡をアピールするとともに、巨大マーケット東京のニーズ、さらには次世代の購買層である若い世代の反応を探ることができ、手応えを感じました」とメンバーの国本耕太郎さん。
t[j]rでは今後、HP作成や新商品開発を進め、ブランド力を強化。来年度の再出展に向けて取り組んでいきたいと考えている。

●t[j]r事務局
☎0766-21-0262（高岡漆器㈱内）
tjr@abox23.so-net.ne.jp

万葉線に新型車両が登場、質の高い景観づくりの起爆剤に。

高岡と新湊を結ぶ路面電車「万葉線」に、モダンなフォルムの超低床車両1台が導入。平成16年1月21日から営業運転が始まった。
新車両は長さ18.4メートル、幅2.4メートル、高さ3.4メートルの連接車タイプで、座席数が30席（定員80名）。床面の高さが30センチと低く、ホームからノンステップ昇降できるユニバーサルデザインとなっている。
車両の製造は新潟トランシス社、内外装デザインはプロダクトデザイナーの佐藤康三さんが担当。車体は曲線を生かし、赤を基調に黒とグレーのラインを施したデザインで、鮮やかな赤色は閉塞感が漂う今、忘れかけている情熱をイメージしたもの。座席の高さや硬さ、角度などは人間工学に基づいて算出。車体にあしらったシンボルマークには高岡の伝統工芸、螺鈿を採用するなどクオリティの高さを追求した。
「今回は色、素材、形状など全てにおいて質のデザインに取り組みました。近年、文化的資質を失ってしまった街の景観に起爆剤として投入し、質の調和、親和を醸成していきたいと思いました」と佐藤さん。
新型車両は今年、もう1台導入される予定。2006年度までには現行11台のうち、6台が入れ替わることになっている。

●万葉線㈱
☎0766-25-4139
http://www1.coralnet.or.jp/manyosen/
●㈱コーゾーデザインスタジオ
☎03-5452-0145
http://www.kozodesign.com
●KOZO Factory
☎0766-20-0888

特集

富山のデザイン開発の動向

質の高い伝統工芸や工業技術に恵まれた富山県。特に県西部には金属加工や木材加工、漆芸などの分野で卓越した技をもつ職人が多く、全国的にも名高い「素材と技術の集積地」となっています。
富山県総合デザインセンターではこうした技術を生かしたデザイン開発・商品開発に向け、様々なかたちで県内企業をバックアップしています。
そうしたなか、昨年から今年にかけては海外デザイナーを起用した商品開発や、東京在住デザイナーとのコラボレーションの推進など、県内企業に新しい動きが見られるようになりました。
今回の特集ではこうした企業の取り組みをはじめ、デザインセンターが主催している商品開発研究会の活動も含めてご紹介します。

design talk

近藤 康夫・佐藤 康三デザイントーク

プロダクトデザイナーの佐藤康三さんは平成14年秋、高岡市内にモックアップ工場を開設し、県内に集積する鋳造や漆の技を活用したモノづくりをスタートさせました。一方、インテリアアーキテクトの近藤康夫さんは昨年、立ち上げた家具ブランド「ABデザイン」の製造メーカーの一つに北陸アルミニウム㈱を選びました。デザイナーの立場から一歩踏み出し、新しいプロジェクトを起動させたお二人に今後のビジョンと富山のモノづくりの可能性についてうかがいました。

北陸アルミで製造した「ABデザイン」のコレクションライン、Bデザイン。

「ジャパンモダン」がコンセプトのAデザイン。

近藤　康夫　近藤康夫デザイン事務所代表取締役

1950年東京生まれ。1973年、東京造形大学造形学部デザイン学科室内建築専攻修了。ブティック、オフィス、ショールーム、飲食店、住宅、公共建築などのインテリアデザインをメインに手掛ける。また建築、インテリアプロダクトの商品化にも携わり、2003年、自らデザインした家具のメーカー「AB Dsign」を設立。著書に「インテリアスペースデザインニング」「YASUO KONDO AB Design」など。

佐藤　康三　㈱コーゾーデザインスタジオ代表取締役

1951年東京生まれ。1976年、ミラノデザイン工科大学インダストリアルデザイン科卒業。ミラノ、ロドルフォ・ボネットスタジオを経て1983年、㈱コーゾーデザインスタジオ設立。1987年よりグッドデザイン賞選定委員。1991年、KOZO PROJECTがニューヨーク、クーパーヒューイット美術館パーマネントコレクションに選定。2002年、富山県高岡市にKOZO Factoryを開設。

佐藤氏は高岡市内にモックアップ工場を開設。

日本が長年、蓄積してきた“質”をメイド・イン・ジャパンとして輸出していく。

富山は全国有数の技の集積地

近藤●佐藤さんは2002年秋、高岡の創造者支援センター内に工場を開設され、以来、定期的に高岡に滞在してモノづくりをしていらっしゃいますが、高岡との関わりは長いですよね。
佐藤●もう15年ほどになります。きっかけは名古屋の国際デザイン博で当時、竹中製作所デザイン室長だった金子さん（現：高岡市創造者支援センター長）と出会い、同社で商品を作ってもらったことから。その後、クラフトコンペの審査員や市のデザインアドバイザーとして度々訪問するようになりました。私はイタリアでデザインの仕事をしていましたのでヨーロッパの地場産業も多く見ているのですが、高岡のモノづくりの技術集積は他市に比べ突出していると実感しました。そんな街を訪れるたびに、日本のモノづくりや文化、素材などをもう一度きちんと見直してみたいという気持ちが強くなり、この街に工房をもちたいと思うようになったんです。東京の仕事を整理してでもこの街で職人さんたちからモノづくりの基本を学びたいと･･･。そんな時、運良く、支援センターの話を頂いたので飛びついたわけです。
近藤●私は80年代から400件以上のブティックをつくってきましたので全国の地方都市を回ってきました。でも日本海側の仕事は少なく、デザインに関してあまり敏感でない土地柄なのだという印象がありました。でも3年前からデザインセンターのワークショップのアドバイザーをさせてもらい、イメージが変わりました。まずデザインセンターの取り組みに驚きましたし、これまで接したことのなかった職人さんたちと交流することができ、モノづくりの現場を見て自分も何か作ってみたいという気持ちが湧いてきました。こうした体験は、今回の家具ブランドの立ち上げに少なからず影響していると思います。富山と接点ができたことで、「ABデザイン」のアルミ家具製造で、高い技術力をもった北陸アルミさんと知り合うこともできましたし。
佐藤●私が東京で仕事していて面白くないと思ったのは、デザインの仕事がペーパーや、データのやり取りになってきたからです。現物を見ないで仕事が進んでいってしまう。それで、手工業的な工房がほしいと思ったのです。高岡は産地が集まっているのがいいですね。木地屋も、鋳物も、和紙も漆も数キロ圏内にあってすぐに製作所や職人さんに会える。こんなところは他にないですよ。

下請けに頼らない、売り方も考えていくことが必要

近藤●これまで地場のメーカーはほとんどが下請けでやってきましたよね。大手に言われるまま設備投資をして作ってきた。昔はそれでうまくいっていたんです。でも成熟しきった今、新しい方法論を含めて次のステップにいかなければならない時期にきている。地方の作り手には、自分たちの作ったものがどう売られているか見えないという現状がありますが、この背景には問屋がたくさん入っていたことに問題がある。もっとも問屋はギルド的な金融業も兼ね、作り手を守ってくれましたから否定するわけじゃありませんが、これからはどう売って行くか、問屋も作り手ももっと考えていかないといけないと思います。
佐藤●日本は近代化のなかで、独自の文化やオリジナリティをわざわざ捨ててしまった事が多いのです。それで安いモノを大量に作って輸出して成長してきたのですが、これは欧米から受注生産をしていただけで日本は下請けだったわけです。だからもっと安く作る中国が出てきたら、地方の産地は空洞化してしまった。幸い、高岡のモノづくりは伝統色が濃くて、完全な下請けでなかったので独自の産業文化は残っています。ともかく受注型輸出産業の時代は終わってしまったのですから、もうこれからは下請け受注に頼らないオリジナルを作っていかなければ道は開けないんですよ。
近藤●「ABデザイン」のアルミ家具は今、北陸アルミさんで作ってもらっていますが、これも企業としてどういう可能性があるのか、売るにはどうしたらいいか、そういうことも含めて考えていく必要がありますよね。私はマーケティングには興味ありませんが、流通も含めた企業戦略は必要だと思います。
佐藤●マーケティングは重要な点もあるけど、結構危うい。日本のようにこれだけ成熟した社会では敏感な人間には必要ないと思いますよ。むしろマーケティングで出た結果と違うモノを作り出していかなければならないと思います。

日本の質を発信していきたい

佐藤●今、量の時代は終わって質の時代でしょう。その中で、私も自分なりに質の高いモノを作っていきたいと考えています。今回、デザインした高岡の万葉線（Topics(p.4)に掲載）も素材、色、形などすべてに高品質を追求し、地方都市が失いかけている文化的な質を再認識するきっかけになればという思いを込めました。今、ライフスタイルが大きく変わってきて、変化に対応する必要はあるけれど、私は日本が大事にしてきた文化を今の感覚で置き換える心構えは大切だと思っています。
近藤●やっぱりメイド・イン・ジャパンですよね。日本がずっと蓄積してきたものを生かした上でのメイド・イン・ジャパンを作っていくべきです。私が作っている家具は、定番ラインのAデザインとコレクションラインのBデザインがあるのですが、Aデザインのコンセプトは流行に左右されない「ジャパンモダン」なんです。
佐藤●近藤さんのAラインには日本的なシズル感があると思います。いい意味での間の取り方というか･･･。日本の生活と欧米生活は、間の取り方が違います。日本人の時間と空間の中にある間の取り方。これをきちんと意識してデザインしていくことが大事だと思います。これからのメイド・イン・ジャパンは60年代の「安かろう、悪かろう」でも、70〜80年代の「安全ブランド」でもなく、「日本の質」の再考です。この質を世界に発信していきたい。今、いい意味での競争社会に入ってきています。そんな中で富山のモノづくりには大いに可能性があると思います。
近藤●ナンバーワンじゃなく、オンリーワンを目指している富山ですからね、競争力はあると思いますよ。

Interview
県内企業トップインタビュー

高岡市にある北陸アルミニウム㈱では建築家・高市忠夫さんによる調理器具シリーズやインテリアアーキテクト・近藤康夫さんによるアルミ家具を商品化。一方、富山市にある㈱リッチェルではミラノ在住デザイナー・蓮池槇郎さんと組んだテーブルウェアを開発し、新しい市場開拓に乗り出しています。両社の社長にデザイン開発の経緯や今後の展望についてうかがいました。

機能性とデザイン開発を兼ね備えた「エッグフォルム」。右端は建築家の高市氏。

北陸アルミニウム株式会社
高岡市笹川2265
事業内容：調理器、業務用製品、建材製品、インテリア製品、工業製品などの製造販売
http://www.hokua.com

北陸アルミニウム株式会社

デザインの付加価値でブランド力を高めていきたい

荒井　毅　北陸アルミニウム株式会社代表取締役社長

――御社の調理器具は全国的にも高いシェアを確保していますね。

荒井社長●フライパンでいえば国内では現在、年間約1800万個が消費されており、その約85%が中国や韓国などの海外製品、残り約15%が国産です。国産品でみれば当社はトップクラスだと思います。当社製造品目の割合としては調理器具が全体の6割を占めています。残りはエクステリア商品が2割、建材が2割ぐらいになっています。

――最近の業界の状況は？

荒井社長●バブル崩壊後はデフレ傾向が進み、安ければいいという風潮がありました。しかしこうした傾向が底を打った今、「価格競争に左右されない品質の良いもの」に対するニーズも出てきました。こうしたニーズには我々の技術力が生かせると思っています。

――海外製品との差別化を強化していくということですね。

荒井社長●そうですね。量産品に関しては海外の協力工場と連携して一定量を確保していきたいと思っていますが、国内で作るものに関しては高品質・高機能を追求して差別化していきたいと思っています。一つは環境への配慮。ラインでは薬品を使わずに製造できる鍋を開発したり、ISO14000シリーズの認証取得にも取り組んでいます。もう一つはデザイン性を重視した商品開発です。この春、発売する「エッグフォルム」は機能性とデザイン開発を兼ね備えた日本から世界に発信できる新商品として開発しました。

――エッグフォルムのコンセプトは？

荒井社長●今まではアルミ鋳物の特徴を生かした商品が多かったのですが、今回は「調理性が良い」という切り口で開発しました。商品はフライパン、片手鍋、両手鍋など10アイテムほどあり、熱源はIHヒーター、ガスの両方に対応。熱源から何センチ離せば取っ手が熱くならないかなど、細かくシミュレーションしながら最適な形状を作り出しました。内面のコーティングには最高級のものを施しています。こうした高い機能性に、今回は建築家の高市忠夫さんを迎えて一貫したデザイン性を加えました。開発にこれだけの時間をかけたのは初めてのことです。

――このシリーズの開発で社内の気運も高まってきたのでは？

荒井社長●そうですね。従来品はミドルクラスのものが多いのですが、この「エッグフォルム」は本物志向の市場を開拓していけると思います。将来的には日用品のスターブランドにしていきたいですね。

――近藤康夫さんが昨年立ち上げた家具ブランド「ABデザイン」には株主として参加され、アルミ家具の製造をスタートされましたね。

荒井社長●当社のアルミ家具はこれまで受注生産が多かったのですが、今後は自社製品も提案していきたいと考えていた時に近藤さんからオファーがあり、一緒に成長していきましょうというパートナーシップを結んだわけです。当社ではこれまでコクヨやオカムラといった国内大手や、アルフレックスなどの海外ブランドのOEM商品も手掛けてきましたので品質管理については随分鍛えられ、自信があります。近藤さんにはこうした品質の高さを認めてもらえたのだと思っています。

――ABデザインのプロジェクトはいつから？

荒井社長●お話をいただいたのが昨年1月。テーブルやチェスト、ベッドなど5アイテムほど製造して10月に発表しました。デザイン性を重視した家具で、アルミ素材を生かした曲線や細いラインも多用しているのですが、家具としての強度も必要。特に椅子は荷重計算が難しく、デザイン性と機能性の妥協点を見出すのに苦労しました。今年から本格稼動になると思います。

――今後もこうしたコラボレーションを進めていくのですか。

荒井社長●当社の品質を認めてくれる企業があれば挑戦していきたいと思っています。どことパートナーシップを組むかはブランド力を高めていく上で重要な選択だと思います。デザイン力や品質の高い商品なら、購買力の高い商品として市場を拡大していくことができますからね。

6月に発表する新商品について、ミラノ在住の蓮池槇郎氏（手前）と検討。

株式会社リッチェル
富山市水橋桜木136
事業内容：プラスチック家庭用品、園芸用品、ペット用品、ベビー用品、工業用品、業務用品、介護用品、什器・エクステリア用品の製造販売
http://www.richell.co.jp

株式会社リッチェル

見せ方、売り方も含めたデザイン開発を推進していく

蓮池　浩二　株式会社リッチェル代表取締役社長

――今回、開発されたテーブルウェアは従来の商品とは違うハイエンド商品としての位置づけを狙ったものですね。

蓮池社長●今、当社の商品は全国のホームセンターでの販売が中心ですが、このシリーズはもっと販売先を絞り込んでいきたいと考えています。セレクトショップやライフスタイル雑貨の店に置くことで、ホームセンターとは違う需要を喚起していきたいと思っています。今は首都圏を中心に100～150店舗ほどで検討しています。

――ミラノ在住の蓮池槇郎さんがデザインした商品ということで、ブランドイメージも高いと思いますが。

蓮池社長●当社は一般的な家庭用品のメーカーとしては認知されていますが、今回の商品にはワンランクからツーランク上の高級感を打ち出していきたいという思いがあります。そういう意味では著名デザイナーの知名度は大きいと思います。

――デザイン性の高い商品を開発することになった経緯は？

蓮池社長●当社は元々テーブルウェアが主力商品でした。かつては「卓上のリッチェル」といわれたくらい…。しかしテーブルウェアは加工費が高く、価格競争が激化する中で売り上げが落ち、その一方で収納用品が好調で、そちらが主力になっていきました。しかし収納用品はかさばるため、在庫の倉庫代にコストがかかるのです。それで社内で商品の見直しをした結果、もう一度かつての卓上商品を省みようということになりました。家庭用品の見本市などに出かけるとハッと目に付く商品に出会うのですが、それは大体ヨーロッパのブランドです。国産製品などとは違う色、フォルム、デザインの美しさがあるのです。それで長年、ヨーロッパで活躍されている蓮池さんにお願いして、デザイン性の高いテーブルウェアを開発してみようということになったわけです。

――従来の商品とは考え方が違うということですね。

蓮池社長●ホームセンターで売られる家庭用品に求められるのは機能とコスト。グレード重視のデザインをのせるとどうしてもコストが上がってしまうので価格競争に勝てないのです。ですから当社もホームセンター向けの商品は徹底したコスト削減で作ってきました。しかし大量生産・大量消費の時代が終わった今、価格競争の市場から脱却し、利益率の高い商品を作って売っていくには新しい手法が必要。今回の蓮池さんとのプロジェクトでは、デザインという付加価値をテーマに商品開発することで、今までになかった新しい考え方を社内に浸透させるきっかけになったと思います。こうしたデザイン開発にあわせて技術面でのレベルアップも図りました。社内に2色2材成型の機械を導入し、多彩な表情のある商品も作れるようにしました。

――商品化にはどのくらいの期間がかかりましたか？

蓮池社長●平成15年の1月からスタートし、実際に動き出したのは7月。今年1月にほぼ原型ができあがり、ミラノの蓮池さんと最終検討し、この6月に発表します。販路は海外のマーケットも含めて戦略的な市場開拓をしていく計画です。デザインはフォルムだけでなく、売り方、見せ方も含めたトータルなものだと思います。お客様に一歩先のライフスタイルを思い浮かべてもらえるような演出方法、販売方法も提案していきたいと思い、今、インターネットなどでもアイディアを募ったり、情報収集したりしています。

――グローバルな展開が期待できますね。

蓮池社長●すぐには変われないとは思います。急いで利益を上げようとしたら単なる刈り取りに終わってしまいますからね。プロセスを育てていかないと本当のボトムアップにはつながらないものです。まだスタートしたばかりですが、今回のプロジェクトによって社内に新鮮な空気が入り、若いデザイナーたちは大きな刺激を受けました。将来的にはレベルアップにつながっていくと思っています。

Seminar
商品開発研究会

富山県総合デザインセンターでは平成11年度から県内企業12社と共に商品開発研究会を発足し、講演会や視察、デザイナーの紹介、意見交換などを通して商品開発やデザイン開発に取り組んでいます。昨年度、開催された講演内容を要約してご紹介します。

体型にあわせて選べる椅子「マイチェア」

カッシーナ社「キャブ」

徒弟時代、昭和30年頃の新橋

［テーマ］

モデラー歴50年。私のモノづくり、家具づくり

第2回　平成15年10月22日（水）
講師：宮本 茂紀　家具モデラー／株式会社ミネルバ代表取締役

みやもと・しげき／静岡県生まれ。53年斉藤椅子製作所、北海道大島木材工芸などで椅子張り職人として修業。66年東京品川区に五反田製作所を創業。73年渡欧しイタリア・ドイツでモデラーとしての技術を習得。帰国後、迎賓館や宮内庁の家具修復を開始。83年国内外メーカーの生産部門として㈱エリアント設立。86年試作開発専門の㈱ミネルバ設立。88年ミラノサローネに国内初の現地出展作品発表。91年東京都知事より優秀技能賞受賞。99年寝台特急カシオペアの室内製作に携わる。2001年マイチェア発表。03年日本橋三越でマイチェアを展示販売。

ヨーロッパ各地で素材を学び、新しい技術を習得

家具の世界に入ったのは昭和28年。深川の斉藤椅子製作所に弟子入りし、親方の家族と暮らしながら3年ほど丁稚奉公しました。当時は戦後の復興で工業化が進み、椅子の製作も木材加工、塗装、張地などと分業制になっていった時期でしたが、私の親方は修理が専門でしたので全部やっていました。手工業的な仕事です。この経験はその後の仕事の範囲を広げていく上で随分役立ったと思います。
椅子のクッションは稲藁や綿が主流でしたが、昭和30年代半ば、ウレタンフォームを使った椅子が登場しました。これは従来の椅子の作り方とは全く違う技術を使った工業製品です。私も含め、手工業でやってきた家具職人たちは仕事がなくなるのでないかと危機感を覚えましたが、私は思い切って新しい素材に切り替えました。このウレタンフォームの出現は家具業界にとって大きな転換期だったと思います。
昭和39年〜45年頃はヨーロッパのメーカーが日本に参入した最盛期だったと思います。イタリアのアルフレックス社も製品を国産化することになり、その仕事で3ヶ月間、現地に研修にいきました。工場では通訳をつけてもらって頑張りましたが、仕事以外でスタッフとバーに行ったり、チェスをしたりして交流した中からもいろんなことを学びました。その後、カッシーナ社にも研修に行きました。ここでは「キャブ」という硬い皮を使った椅子の作り方を習得するため、馬具屋にいって鞍を作る技術を学びました。このほかにはドイツの工場やデンマークの王立アカデミーでも様々な技術を学ばせてもらいました。
帰国後は、木について深く知りたいと思うようになり、同じデザインで素材の違う椅子を200種類ほど作ったりしました。それぞれの木がもつ性質を一つ一つ、体で覚えていったという感じです。

デザイナーとモデラーの理想的な関係を模索

80年代に入ってからのバブルの時代は良くも悪くもいろんな実験をさせてもらったと思います。梅田さん、倉俣さん、川上さんといった著名デザイナーからも依頼を受け、いろんな椅子を作りました。ポストモダンが主流の時期は、私たちがこれまで経験したことのない色彩、フォルムが出てきて、いろんな刺激にはなったのですが、反面、自分でうまく消化できなかったこともありました。実験的な試みも多く、迷っていた時代ではありましたが、次の仕事へのステップとして収穫になったことは事実だと思います。
ポストモダンの時代が終わった頃からは、イタリアをはじめヨーロッパの建築家やデザイナーとの仕事をすることが増えました。イタリアはモデラーとデザイナーがコラボレーションしながらいいものを創り出していく土壌ができていました。モデラーの存在がきちんと認知されている点はうらやましいと思いました。フィリップ・スタルクの椅子もこの頃に手掛けました。彼の感性はわかりにくいのですが、モデラーの立場からもいろんな提案をして試行錯誤するプロセスがとても面白かったです。こちらからの提案コストは自前ですが、「こんなものがあってもいいんじゃないか」、「こういうことができたらいい」と、常に提案していく姿勢は大事だと思います。

人間工学に基づいたオーダーメイドの椅子を制作

最近は寝台特急の内装の仕事をさせてもらいました。リスクの大きい仕事だったこともあって、会社のスタッフには反対されたのですが、私は挑戦してみたかった。ここでは人間工学に基づいた座席シートとインテリアを担当しました。私は実験的なことは結果を確認しないと先に進めない性格なので、この仕事に関しては電車の構造の検証などにも随分時間がかかりました。でもやってみて「電車は大きな鉄の塊だけど私は小さなディテールで関わっていける。どんな大きなものでもディテールの連続の上にあるのだ」ということを実感できました。
電車や自動車の仕事で人間工学の視点で椅子を作ったことは、マイチェアの仕事へとつながっていきました。これは一人一人の体型、ニーズにあわせてつくるオーダーメイドの椅子です。すべて天然素材でつくる椅子です。コストも時間もかかる椅子ですが、モノづくりは本来、こういう視点でニーズに対応していかないといけないものだと思っています。椅子は面白いですね。マイチェアを作ってますます深いなと思いました。

左／浅野泰弘さんデザインの傘立て「SPLASH」。富山プロダクトコンペではアルミ鋳造だったが、合成ゴムで成型し、カラフルなカラーバリエーションを展開した。
中／澄川伸一さんデザインのピルケース「pecon!」は、95年度富山プロダクトコンペ入賞作品。現在、最終段階の改良を加えているところ。
右／シリコンゴム製の動物型の輪ゴム。ミュージアムショップで発売し、ブランド力を上げてから一般のショップで販売。5個入り300円。

［テーマ］

アッシュコンセプトの商品開発とマーチャンダイジング

第3回　平成15年12月17日（水）
講師：名児耶 秀美　h-concept（アッシュコンセプト）代表取締役

なごや・ひでみ／1958年生まれ。81年武蔵野美術大学造形学部卒業、㈱高島屋宣伝部入社。84年㈱マーナ入社、企画室長。商品開発・プロデュース·マーケティング戦略に携わる。2002年「h-concept」設立、代表取締役。生活者とデザイナーが楽しめるモノづくりを目指し若手デザイナーとのコラボレーションを推進。デザイナーブランド「+d」を発信、世界販売にも着手。海外ではMOMA、グッゲンハイム、コンランショップ、国内ではフランフラン、ソニープラザ、東急ハンズなどで展開中。

デザイナーとパートナーシップを組んで作り出していく

学生時代は美大で造形デザインを学び、卒業後は高島屋に入社し、宣伝部でディスプレイを担当しました。高島屋は学生時代からアルバイトをしていて、デンマークのベア・シュメルシュアさんというデザイナーのアシスタントとして様々なデザインの手法を学びました。その後、退社し実家の仕事に就きました。
私の実家は「マーナ」というメーカーです。元はブラシメーカーでしたが、私が入社してから商品開発を進め、今は家庭用品全般を扱うメーカーになっています。その一環として、数年前に雑貨コンペを実施しました。応募は850点ほどあり、キヤノンや東芝、ソニーなど大手メーカーのデザイナーも大勢いて、かなりレベルの高いものでした。正直な気持ち「こんな小さな家庭用品メーカーのコンペにトップデザイナーが提案してくれるの？」と驚きました。それでもっとデザイナーをバックアップしていきたいと思い、新しく「アッシュコンセプト」という会社を立ち上げました。この会社ではメイド・イン・ジャパンにこだわったモノづくりで、世界に発信していきたいと思っています。

できないと思えば負け。やり方を考えればモノは売れるし、作る事が可能になる。

最初に商品化したのはシリコンゴムの輪ゴム「アニマルラバーバンド」です。シヤチハタのコンペで入賞している作品なのですが、コンペというのは「絵に描いた餅」の場合が多く、ビジネスになるケースが少ない。それで我々で商品化させてもらうことにしました。
私は、デザインというのは商業ラインの上に成り立つアートだと思っています。デザインとアートが交わっている部分に感動があるのではないかと･･･。その部分をビジネスとしてきちんと成立させたいと思いましたので、「アニマルラバーバンド」はニューヨークのMOMAに持ち込みました。日本で売っても「どうせ輪ゴムでしょ」と言われるだろうから、まずはミュージアムショップから攻め、それから日本で売ろうと思ったのです。MOMAのバイヤーはこれを見るなり、ニコッと笑って「Oh,Japan Design, Japan Quality!!」と即決してくれました。その後は、スミソニアンやメトロポリタンにも置くことができ、今、全世界で300万匹ほど生息しているはずです（笑）。日本の企業はできない理由を並べるのが好きですが、やり方を考えて、決断して動けば何とかなるんです。成功手段は生まれます。
富山のコンペで入賞した浅野さんの傘立ても商品化しました。当初はアルミ製だったのですがゴムを提案してコンパクトに作りました。澄川さんのピルケースもそう。これは95年のコンペで賞をとったものですが、このデザインは年月を経ても古くなってないところがいい。技術的なハードルもありましたが、私はいろんな工場の人から「難しい」「できない」という声を聞くと「よっしゃ、誰も作れないんだな」と嬉しくなります。他ができないことを克服した時は、強いですからね。

日本は世界のデザインの潮流を創り出していく

今もいくつか仕込んで作り続けています。今はモノがあふれている時代ですから、デザインの力がないと売れない。しっかりとデザインされたものじゃないとメーカーはゴミをつくるだけになってしまいます。これはやっちゃいけないこと。ですから私はデザイナーとは本音で話し合いますし、ビジネスパートナーとしていろいろと口出しもします。市場を知るにはバイヤーや問屋の声だけでなく、たくさんのユーザーから生の声を聞いて徹底的に検証します。駄目かなと思っても諦めずに検証する、そこからチャンスが生まれることもあるのです。
世界から見ても今、日本のデザインの価値はしっかりと認められています。これは日本人が気づいていないだけで、もっと自己主張していく必要がある。例えばイタリアのデザインはかっこいいけど、ちょっと使いにくくて我慢しなければならなかったりしますが、日本のモノにはそんな使い辛さがありません。細やかな感性や技術は昔から培ってきた文化のDNAとしてもっているのです。
私は日本というブランドが今、一番可能性があると思っています。富山はモノづくりの産地としてとても恵まれた環境ですね。私もこれから富山の企業のみなさんから知恵や技術を分けてもらって、新しいメイド・イン・ジャパンを創り出していきたいと思っています。

北欧のデザイン／北陸のデザインフェスタ

受け継がれるクラフトマンシップ

2003年10月1日(水)～14日(火)　富山県産業高度化センター展示室

北欧のデザインは、森や湖など自然のフォルムに原点があるといわれます。
素材を生かし、職人の技が生み出すシンプルで機能的なデザインは、
人間と自然両方への思いやりをもったデザインとして評価されています。
一方、北陸では長い歴史と伝統のもと、質の高い伝統工芸品が培われ、国内有数の工芸産業が集積しています。
北欧と北陸の生活文化に共通するのは、厳しい自然環境の中で育まれた豊かな創造性、
そして伝統や技術を重んじながら受け継がれてきたクラフトマンシップです。
北欧のデザイン／北陸のデザインフェスタ（主催:高岡市デザイン・工芸センター、後援:富山県総合デザインセンター）
では、スカンジナビアデザインを代表する生活用品と、新しい進化を目指す北陸のモノづくりを集めたデザイン展、
「北欧と北陸に受け継がれるクラフトマンシップ」と題したフォーラム、
自然素材をテーマとしたワークショップを開催。
これからの時代に求められるモノづくりについて考察しました。

フォーラム「北欧と北陸に受け継がれるクラフトマンシップ」

2003年10月4日（土）　富山県産業高度化センター研修室

本当に必要なモノだけをつくるという発想

佐藤●北欧はデンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンの4カ国。スカンジナビアデザインというとこの4カ国のデザインを指します。今回は北欧と北陸のモノづくりを探りたいと思います。まず高橋さんから北欧の情報を提供していただきたいと思います。

高橋●北欧の環境機器やプロダクトの輸入販売を仕事としていますので、特にスウェーデンは頻繁に往来しています。北欧デザインの背景としては①厳しい自然と貧しい暮らし。最小限の資源でどう便利に暮らすかという工夫があること。②商圏が狭いため、常に海外輸出を考えたモノづくりをしていること。③生活レベルで日常品を美しく使いたいという発想があること。④自然との共存意識が強いこと。⑤ヒュッケ（団らん）を愛していることなどがあります。北欧のデザイン会社やメーカーは首都に集中していません。どの国も著名なメーカーは地方にあり、地方から世界へと発信しています。そして企業とデザイナー、クラフトマンとのコラボレーションが盛ん。北欧の人たちは洋服や外食よりも、家庭に投資しています。見栄とかブランドに左右されず、快適に暮らすため必要なものだけで生きているというライフスタイルには感心します。この姿勢を学べば、日本人も豊かになるのではないかと思います。

小松●私はスウェーデンのカペラゴーデンという工芸学校に滞在し、北欧デザインについて調査したり、制作活動したりしていました。この学校は陶芸、木工、染色、そして自給自足の中から必要なものを考えて作るというポリシーからガーデンの科目があります。校内にある家具は棚、机、工具入れなどすべて学生の作品です。全部、自分のためにあつらえるという感覚。毎日の暮らしを少しでも快適に、美しくしたいという意識が強いのですね。学生は学校から材料を支給してもらい、制作したものは外で販売してもいい。また実際、一般家庭に入って、注文を聞いて家具を作るということもあります。学生でも常に社会とつながっていて、制作したものが街の中に生かされています。そういう教育方針には共感しました。

使い手の意識がシンプル＆高機能デザインを育む

佐藤●小松さんがカペラゴーデンで経験されたことは高岡短大の教育の中で実践されていますね。では安藤さん、北陸のご意見をいただきたいと思います。

安藤●輪島は古くから漆器の産地です。当社の「花ぬり」は84年にオープンしました。生活の中に漆のない若い世代に向けて漆の良さ、使いやすさを提案しています。輪島塗は作家が多く、高価なイメージが強いのですが「花ぬり」ではそれを払拭したいと思っています。シンプルな漆器を販売し、見るだけでなく使っていただくことで漆

出席者

［コーディネーター］
佐藤 康三
プロダクトデザイナー
㈱コーゾーデザインスタジオ
代表取締役

［パネラー］
高橋 百合子
㈱オフィスオクト代表取締役
㈱エンヴァイロテック代表取締役

［パネラー］
安藤 五十治
㈱花ぬりデザイン事務所
取締役・チーフデザイナー

［パネラー］
小松 研治
国立高岡短期大学
産業造形学科教授

フォーラム「北欧と北陸に受け継がれるクラフトマンシップ」

のあるライフスタイルを提案しています。今、小松さんのスライドを見て、北欧のデザインは気負いがない感じがしました。
高橋●例えば北欧でクロム、シルバー、ゴールドの商品を販売してもゴールドは全く売れません。「ゴールドが豊かだ」という意識がないのです。お金持ちにならないと豊かになれないという考えもない。だから飾り気はないけれど、使いやすいデザインが主流になります。
佐藤●北欧のメーカーではレゴ、アラビア、ヤコブセンなどが人気ですが、いずれも装飾をそぎ落としたデザイン。安藤さんの会社が作るものは受注生産の商品は加飾の多いもの、一方、店頭販売する商品はシンプルなものと、差があると思いますが。
安藤●10年前は加飾商品が7割ありましたが、今は無地のものが半分以上です。加飾を否定するわけではありませんが、現代の生活の中ではシンプルなものが好まれてきていますね。

内需に頼らず、日本の現代文化を発信するべき

佐藤●北欧はどの国も小さく人口も少ない。なのに世界的なデザイナーを多数輩出しています。これは国民みんなが常に生活の質を上げようと思っていることの証拠だと思います。
小松●それは元々、自分たちであつらえることの心地よさを知っているからだと思いますよ。そのベースとして、北欧では家庭科、溶接、木工の授業が義務教育として確立されています。
高橋●私がいつも感じるのは、デザインに対する国の支援が非常に大きいということ。例えばスウェーデンの企業が日本に進出したいとき、大使館が積極的にバックアップしてくれます。日本もデザインのレベルは高いのですからもっと海外に出していくといいと思います。変な欧米コンプレックスを持ち過ぎなのだと思いますよ。
佐藤●日本の問屋制度は独特な産業システム。これが変わらないとなかなか輸出は難しいと思います。世界的に発信されているのはゲームとアニメばかり。生活用品は少ないですよね。
安藤●問屋制度はかなり変わってきていますよ。メーカー単体でも海外で売ろうと思えば出て行ける時代になってきたと思います。問屋も今、どう売って行けばいいのか一生懸命考えていますし。
小松●もっと自由に、誰でも作って売れるようになればいいですね。それにはマネージメント力が必要です。いろんな立場の人間が連携を取り合って、職人のデータベースを作って活用していくようなシステムができあがっていけばいいと思います。
佐藤●今後の方向性が少し見えてきたかと思います。日本は今、生活を見直して本当に欲しいもの、本当に使うものをつくることが大事。そして内需だけでなく、自信を持って外に発信していくこと。それを実証しているのが北欧デザインですね。私たちの今後の目標の一つとして見ることができると思いました。

ステープラー「フォルレ26」
ヘニング・アンドレアセン
フォルレ社（デンマーク）

木の器「ランドスケープ」
トゥーリプー社（フィンランド）

はんの木の楕円盛皿
ランカ社（フィンランド）

白樺のポットスタンド
マヤムー社（フィンランド）

「レゴ・ブロック」
レゴ社（デンマーク）

「LINEAチェアー」
Bitco社（フィンランド）

「ステルトン・ライン」
エリク・マウヌセン
ステルトン社（デンマーク）

スペースデザイナー

西田　茂

Nishida Shigeru

1957年富山県八尾町生まれ。1981年㈱宝来社入社。県内全域において、ミュージアム・サインシステム・エキシビジョン・イベントなど公共・民間施設のコミュニケーション・エンターテイメント空間を中心に、総合的な空間・環境演出のディレクションを行う。
【主な業務】仁歩ほたるの里／歴史国道 埴生案内所／YKKファスナー展示コーナー／太閤山ランド総合情報サインシステム／デザインウェーブ2003イン富山など。
【受賞歴】日本ディスプレイデザイン協会DDA賞入選／日本サインデザイン協会SDA賞入選／富山県デザイン協会優秀賞など

■㈱宝来社　㈹076-429-1900
http://www.horaisha.co.jp

観る人の五感に響くような経験価値を提案していきたい

建築からディスプレイデザインへの転向

イベント会場やミュージアム、ショップの空間演出は、ディスプレイ、サイン、照明、グラフィックなど様々なファクターで構成される総合デザイン。作品や商品の見え方は、それらが展示される空間に大きく影響されるものであり、そういう意味で空間演出は人とモノのインターフェイスとしての役割を担っているといえるでしょう。西田茂さんは、幅広いジャンルの空間演出を手掛けるスペースデザイナー。学生時代は建築を専攻し、構造や意匠などの基礎を学ぶうち、空間装飾を主体としたインテリアに興味をもつようになり、東京の専門学校でインテリア・ディスプレイの技術を習得。富山に帰省し、宝来社に入社しました。入社当初はショッピングセンター等のチェーン店、専門店の店舗デザインを手掛け、その後は同社金沢営業所に移り、DCブランドブームに乗ってファッションビル等のブティック設計に携わり、ファッションデザイナー高田賢三氏が立ち上げたカジュアルブランド「KENZO　JEANS」の全国展開にも企画の段階から携わったそうです。

来場者に感動を与える経験価値を演出していく

そんな西田さんに転機が訪れたのは入社して6年目、ディスプレイ業界最大手である㈱乃村工藝社（東京）に出向した時。同社では文化施設事業部に所属し、今まで経験したことのなかった美術館や博物館のプロジェクトに参加しました。
「美術館や博物館のディスプレイは作品の展示だけでなく、グラフィック表現、映像、メカニックなどいろいろな要素が絡んだ総合的な空間演出です。様々な情報をどうまとめ、つくりこむか。切り口やテーマでいろいろな手法があるので奥が深く、勉強になりました」と西田さん。出向期間中は、高岡市の万葉歴史館や庄川町の水資料館のプロジェクトにも携わり、企画から設計、施工まで様々なノウハウを学んだそうです。
文化施設の空間デザインには美しさや解りやすさだけでなく、情報の編集能力が求められます。例えば博物館ならテーマの構成、資料や写真の収集、時代考証、館内の動線にあったストーリー展開など･･･。特に近年の傾向としては、建築空間も含めた経験価値の提案が求められています。経験価値とはEntertainment（娯楽）、Education（教育）、Esthetic（審美）、Escapist（脱日常）といった要素を取り込み、その空間でしか得られない時間や感動を提供するもの。西田さんはさまざまな美術館、博物館プロジェクトに関わり、こうした経験価値を具現化する手段として、デザインがもつ役割の大きさを実感したそうです。

匂いや触感、情緒にも訴える空間デザイン

2年間の出向を経て本社に戻った西田さんは、県内の文化施設の開館プロジェクトや企画展の仕事を積極的にこなすようになりました。魚津市埋没林博物館や桂湖ビジターセンターでは、建築と一体となった空間演出を、また富山県立近代美術館の企画展や富山県総合デザインセンター主催のイベント会場では、光や色を効果的に使ったスケール感のあるディスプレイを提案しています。
「いつも新しい展示のあり方を考えています。今後は触感や嗅覚など、五感に訴える展示手法を模索しながら、人々の心に刻まれる経験価値を提案していきたい。また、これから市町村合併など地方の再編成が進む中で、地域色、地域らしさを意識した新しいデザインの創出をしていきたいと思っています」。
ミュージアムやイベント会場は、来場者にとって新しい感動や驚きに出会うことのできる空間。知的好奇心を満たすだけにとどまらない斬新な提案を目指す西田さんのチャレンジにこれからも期待が高まります。

1.歴史国道倶利伽羅源平の郷「埴生口」。歴史国道を紹介するガイダンス施設で、江戸時代の乗り物体験や航空写真を使った床面ディスプレイなど子どもも楽しめる演出が好評。
2.八尾町に開設したほたるの館。蛍の発光を忠実に再現した人工発光システムのほか映像、ロボットなどハイテクを駆使した展示になっています。
3.立山博物館特別企画展「石崎光瑶の山」の会場構成。
4.富山県総合デザインセンターが実施している「デザインウエーブ2002イン富山」の展示会場。

企業を成功に導くデザイン

講師／深澤 直人（Naoto Fukasawa Design 代表）
2004年2月4日（水）富山県産業高度化センター展示室

深澤直人さんは、auの携帯電話「INFOBAR」やタカラの新家電「±0」、無印良品など数多くの企業を成功に導いているデザイナーとして知られています。そのデザインアプローチは表層的なデザインではなく、マーケットの特性や企業の個性を生かし、人間の感情までデザインするまったく新しい手法です。講演では市場や環境、情報の捉え方などについてお話いただき、商品開発における様々なヒントを得ることができました。

「±0」。加湿器

「±0」。液晶だがブラウン管の形をしたテレビ

すべての情報は
人間を含めた環境の中に溶けている

本日は私の考えるデザインの捉え方をお話したいと思います。まず環境について考えていただきたいと思います。環境という言葉の捉え方は皆さんそれぞれだと思いますが、「人間と環境は別のもの、人間は外側にあるもの」という捉え方と、「人間は環境の一部である」という捉え方に分かれます。私は後者の「自己を環境の一部」として捉えなければ、見えてこないものがあるのではないかと思います。すべての情報の美は人間を含む環境という「入れ子」の中に込められている、環境の中に溶けているのだと考えています。ですから環境を読み取れるようになることは、より多くの情報が読み取れるようになることだと思っています。
では情報をどう捉えるか。皆さんが考える情報というものは、人によって加工され、送りだされたという感じがしませんか。皆さんが絶え間なく環境とインタラクトしているのも、環境の中にある情報を呼吸しているということです。例えば都市の中では物凄いスピードでビルが建設されています。建設中のビルにはシートがかかっていて、それらはグレーやグリーン、ブルーだったりする光景を毎日見ています。これも情報です。これらはデザインとはほど遠いものと思いがちですが、沢山の人が共通に認識している、あえて気にも留めない情報であることがデザインの大きなアイデアの源になることもあるのです。
こうした環境の中にある様々な情報をどうデザインに転換するかが、デザインだと思います。今まで刺激されなかった暗黙の情報がキラッと光り出てくる瞬間があるのです。デザインというのは人間とものと環境の関係性の中で生まれてくるものだと思います。

輪郭の張りが見えるかどうか、
デザインはそこに線を引く作業

例えば、人はタイルの目地の溝に傘の先端をあてて傘を立て掛けます。こういう行動はほとんどの人が自然発生的にやっていることです。だから玄関に目地と同じくらいの溝をつくれば傘立てでない傘立てができるということになります。
人は環境のなかで価値を探し続けています。この連続を「行為」と呼びます。電車に乗っているとき窓を鏡にして顔を見る、座席に座って傘を足に挟むといった行為など…。そんな共通の行為はデザインとは関係なく、環境に内包された価値を自覚せずに見い出しているということです。デザイナーというのは自分の個性や考えを表現する仕事だと思われがちですが、実はそうではなくて、様々な状況において過不足のない関係性の輪郭が見えるかどうかだと私は思っています。言い換えるなら、私の仕事は何かと何かの境目にある1本の線とその強さ（張り）を決めていく作業だと思っています。

「みんな同じでいたい。
でも少しだけ違いたい」という
矛盾する気持ちにフィットするデザイン

auの携帯電話「INFOBAR」のデザインは「みんなと同じものを持っていたい、でも少しだけ違いたい」という誰にでもある矛盾した気持ちにフィットするものとして考えました。タイルをシンプルなプラットフォームと考え、色の組み合わせで少し個性の違いをだすという発想です。当たるだろうなとは思っていました。3種類作って、開発中に自然に呼んでいた名前をそのまま製品の呼び名にしました。それが「イチマツ」「ニシキゴイ」「ビルディング」という名前です。店頭などでは赤とは言わず、「ニシキゴイ、ください！」というふうにすぐに共通言語として使われるようになって、その効果と早さに驚きました。
第2弾としてデザインした「WIN」は、ジャガイモの皮を剥いた時のなんとも言えない鈍角の心地よい感触から造形をイメージしました。「みんな丸いものばかりの中でその皮をむいてしまえ」という感じでデザインしました。
最近は「±0」というブランドを立ち上げました。タカラが出資してくれたプロジェクトで新しい家電や雑貨などをカテゴリーに縛られずにデザインしていこうとしたものです。「±0」には過不足や誤差がないという意味が込められています。これまでに、画面だけしかない22インチのテレビ、液晶テレビだけどブラウン管の形をしたテレビ、受話器の形をしたコードレス電話機、加湿器などを商品化しました。

自分を客観化すること、
環境化することの大切さ

私が大事にしている言葉に、高浜虚子が発言した「客観写生」という言葉があります。客観的に捉えた事象の中に共感が存在することを美と捉えようとしたことです。主観が持ち上がって出ているものほど醜いものはない、意識的であることは、美から最も遠いということだと思います。
形の競い合いは主観的な行為だと思っています。アメリカにいた頃は形の追求の強い興味がありました。その反面、ものの存在の意義と形の意味のミスマッチにも疑問を感じていました。「張り」という言葉の意味を考えていたのもその頃でした。
最近はグラフィックデザイナーとのコラボレーションも増えてきました。いろんな業界のクリエーターと一緒に仕事するのは楽しいことだと思います。大きな企業の仕事も多くなってきていますが、私の中ではいつも小さな1つのデザインから企業の大きな問題を解決していくという姿勢があります。これからも様々なジャンルの人たちとクロスオーバーしていく中で、新しいデザインの価値を生み出していきたいと思っています。

au INFOBAR「ニシキゴイ」

「イチマツ」

「ビルディング」

ふかさわ・なおと／1956年山梨県生まれ。1980年多摩美術大学立体デザイン科卒業。セイコーエプソンのデザイナーを経て、1989年米国「IDEO」社の前身である「ID TWO」に入社。1996年7年半のアメリカ生活を終えて帰国。「IDEO Japan」を設立。2002年12月、IDEOフェローとなり独立。東京に「Naoto Fukasawa Design」を設立する。無印良品のCDプレーヤーや近作のau,INFOBAR、タカラとダイヤモンド社との共同プロジェクト±0も話題となる。2003年、毎日デザイン賞受賞。

講演風景

コクヨにおけるユニバーサルデザイン

講師／竹綱 章浩（コクヨ㈱CS推進センター長）
2004年2月25日（水）富山県産業高度化センター2F会議室

たけつな・あきひろ／大阪生まれ。'76年、コクヨ株式会社入社。オフィス家具の商品開発、商品戦略、オフィス研究所、マーケティングを歴任。'03年からCS推進センター長。現在、顧客の声をいかに商品に活かすか、顧客による評価のしくみづくりなど社内のCS経営を推進。ユニバーサルデザインフォーラム理事、日本インダストリアルデザイナー協会会員。

講演風景

ブランド戦略としての
ユニバーサルデザイン

本日はコクヨのユニバーサルデザインの取り組みについてお話したいと思います。まず、当社が考えるデザインの指針について。当社では「商品を通じて世の中の役に立つ」という企業理念のもと、「デザイン価値の向上を通じて、人・社会・事業に貢献する」ことを目指しています。このデザイン価値を向上させるためのキーワードに、人を中心とした「ユニバーサルデザイン」、地球と環境を守る「サスティナブルデザイン」、使い手と作り手を結ぶ「インタラクティブデザイン」の3つをあげています。
本来、モノづくりはどれも人にやさしくあるべきですから、ユニバーサルデザインという呼び方自体、なくなっていってもいいと思うのですが、現段階としては「企業のブランド戦略」として、意識的にユニバーサルデザインの推進を展開しています。「コクヨと言えばユニバーサルデザイン」と連想してもらえるところまでいけばいいと思っています。
ユニバーサルデザインのブランド戦略は、これまで段階的に進めてきました。それは①従来の商品からユニバーサルデザインの要素を満たすものを発掘すること。②現状の商品を改良・改善してユニバーサルデザインに近づけること。③ユニバーサルデザインを意識した商品を開発すること。④蓄えたノウハウで次世代商品開発へとつなげること、という流れです。
今、社会にはいろんな人が生活しています。当社の考えるユニバーサルデザインは身体能力の低い人や高齢者だけでなく、幼児や妊婦の方、視力の弱い方、外国人なども含め、あらゆるユーザーに使いやすい商品やサービスをめざします。ですから従来品よりも広い範囲を想定し、対応していくため、具体的なユーザーを明確化することが求められます。そのためには商品だけでなく、周辺の環境、たとえばパッケージやカタログ、取扱説明書、販売方法、広告宣伝なども考えていかなければならないと考えています。

開発段階で徹底的な
ユーザーチェックを行う

こうしたユニバーサルデザインの目的を達成するには、ユーザーがどんな生活をし、どんな問題を抱えているのかを十分に把握した上で商品開発のアイディアに結びつけることが大事。このため、当社では商品開発がある程度の段階に来た時、フィードバックして検証と評価を繰り返しています。何度もモニタリングし、その中でどれだけのことに気づけるかが重要だと考えています。
具体的な商品開発を進めるにあたり、当社ではまず商品の使いやすさを阻む要因を言葉にして集めました。硬い、重い、危ない、難しい、壊れやすいなどなど…。次にこうした言葉を分類・整理し、ユニバーサルデザインを実現する要件として①製品としての基本性能が確保されている。②あらゆる状況での安全が確保されている。③表示や色彩、形状などに配慮する。④単純・普遍的な操作性・インターフェイスを追及する。⑤操作の可否や残量などの情報が判定できる仕組みを追及する、という5つにまとめ、さらに「従来品と比較しても遜色ない価格設定」という要件をプラスしました。
製品開発のプロセスでは、先ほども申しましたように途中段階での検証と評価を重視し、実践しています。発売前は企画段階、試作段階、量産試作段階の3回、そして発売後は一定期間に複数回実施しています。例えばある家電メーカーでは過去に家庭用ファックスを発売したのですが、ユーザーは紙の入れ方が全く解らなくてクレームが殺到。デザイナーは発売するまでそれに気づかなかったという話があったのですが、このことからもユーザーの視点で評価することの大切さがわかります。
当社ではユニバーサルデザイン製品開発ガイドラインに基づいたチェックシートを作成し、レベル評価をしています。評価基準は①公平性。②柔軟性。③使用法の明快さ。④情報の認知性。⑤事故の防止と安全性。⑥身体的負担の低減。⑦使いやすい大きさと空間の確保。⑧耐久性と経済性。⑨品質と審美性。⑩保健と環境配慮の10項目です。

企業の経済成長や環境保全にも
不可欠な要素

評価は、実際にユーザーに使っていただいてその動作を観察し、試作品について点数評価をしていきます。お客様相談室に電話していただいた方にモニターになってもらってアンケートをとったり、街角で通行人の方にお願いしてアンケートをとったりもします。こうした数多くの評価を基に修正を加え、改善した試作品を再度、評価してもらいます。それなりの時間とコストがかかりますが、こうした過程を経て発売したユニバーサルデザイン商品に関しては、約7割のユーザーから「従来品よりも使いやすい」という評価をいただいています。
2000年以降、こうした取り組みを続けてきたことで、商品開発のスタッフはもちろん、企業としてのモチベーションもあがってきました。2002年、2003年のコクヨデザインアワードではユニバーサルデザインをテーマにとりあげたり、新聞にPR広告を掲載したりして、ユニバーサルデザインへの取り組みを広く認知してもらう活動も行っています。
今後の取り組みとしては「顧客起点でのモノづくり」をさらに推進していきたいと考えています。まずは多くの人々に使いやすい商品を提供すること（社会的意義）、それによって結果的に売上・利益を増大させること（ビジネス的意義）、ロングライフな商品を提供することで地球環境保護に貢献する（環境的意義）。こうした3つの視点をもって取り組んでいきたいと思っています。

U N I V E R S A L　D E S I G N　S E M I N A R

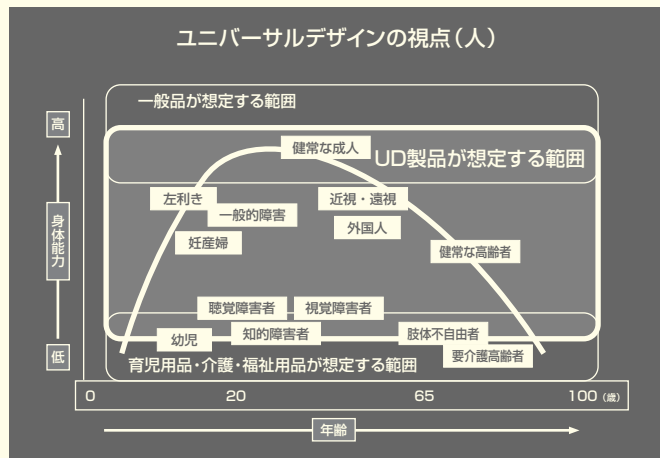
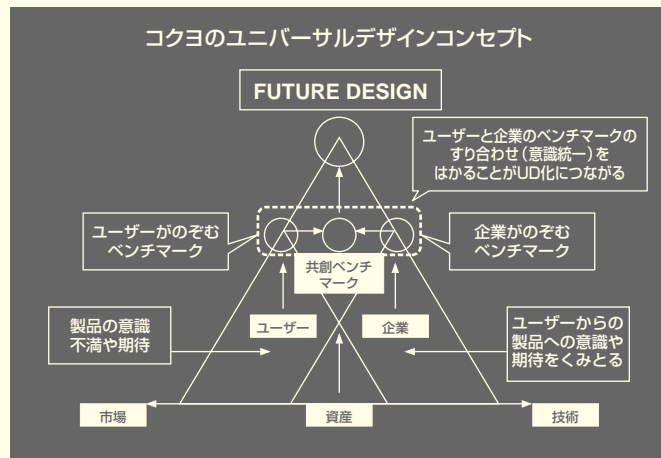
ユニバーサルデザインの視点（人）

一般品が想定する範囲
UD製品が想定する範囲
育児用品・介護・福祉用品が想定する範囲
健常な成人
左利き
一般的障害
妊産婦
近視・遠視
外国人
健常な高齢者
聴覚障害者
視覚障害者
幼児
知的障害者
肢体不自由者
要介護高齢者
高 身体能力 低
0 20 65 100（歳）
年齢

どんな握り方にも対応できる
オープンハンドルのハサミ「テピタ」
（1800円）

取り出しに便利な取っ手付き
チューブファイル
「エコツイン」（800円〜）

角が28ヶ所、次々と新しい角が使える
消しゴム「カドケシ」（150円）

鳥のカタチで安定感抜群。手ぶれのない
修正テープ「ケシピヨ」（630円）

第4回ユニバーサルデザインコンテスト

富山県総合デザインセンターでは、平成12年度より毎年、コンペ形式によるユニバーサルデザインコンテストを実施しています。4回目となる今回は全国のデザイナーや学生から55点の応募があり、さる2月25日、審査会で受賞作品3点を選出しました。

募集テーマ

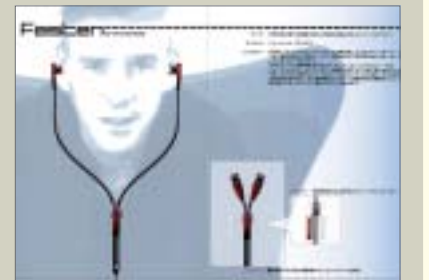
1)日常生活の様々な場面で感じる不便さを解決するユニバーサルデザイン
2)エコロジーに配慮した ユニバーサルデザイン
3)雨または雪に関する ユニバーサルデザイン

審査員

黒木靖夫　（富山県総合デザインセンター所長）
桐山登士樹（同デザインディレクター）

発表

2004年3月5日（金）より
当デザインセンターＨＰで公開

ユニバーサルA賞

「Fasten」（ファスン）　石花啓樹（東京都・デザイナー）

ユニバーサルB賞

「HANG-MARKER」柏原勝登（東京都・CGデザイナー）

「つかみどり」　竹内よしの（東京都・学生）

加賀藩御細工所の“工芸振興”精神を現代に再生、地元に根づいた工芸の研修機関。

金沢卯辰山工芸工房全景

左から窯場、下地・中塗室、染場、象嵌室、宙吹き作業室

■県外施設紹介

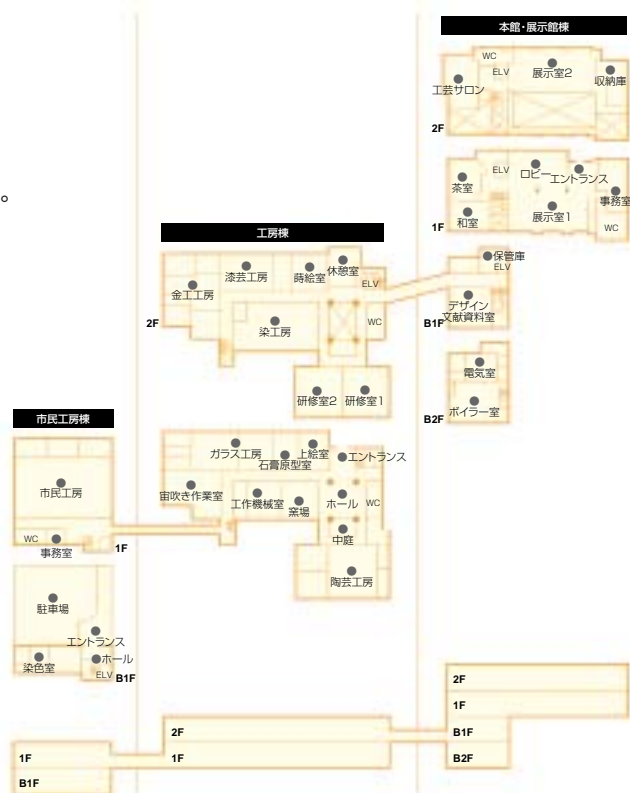
金沢卯辰山工芸工房

金沢市卯辰町ト−10　tel.076-251-7286

伝統工芸の盛んな街として知られる金沢。その源流は藩政時代、加賀藩が金沢城そばにつくった加賀藩御細工所に遡ります。ここでは金工、漆、和紙など24職種の工人を育成させ、献上品や各種の工芸品を制作、また工芸技術を高め加賀文化を開花させました。卯辰山工芸工房は「平成の御細工所」として平成元年に開館。工芸家の育成、工芸作品の展示、体験講座の実施などを通して金沢の工芸文化の継承・発展に取り組んでいます。

開館時間／9:00〜17:00（入館は16:30まで）　休館日／毎週火曜（祝祭日の場合、翌日）
入館料／一般300円、65才以上200円、高校生以下無料、団体（20名様以上）250円

2階展示室

写真上から陶芸工房、漆芸工房、染工房、金工工房、ガラス工房

金沢伝統工芸ゆかりの地に立地

金沢城から卯辰の方角、城下町金沢の美しい街並みを見下ろす卯辰山は、四季の花や緑に恵まれた広大な自然公園。ここは江戸時代、九谷焼の先駆けとなった春日山窯が築かれるなど、金沢の工芸発展に深く関与した地域でもあります。
卯辰山工芸工房は平成元年11月、金沢市の市制100周年記念事業として、この山の頂上付近に開館。「育てる」「見せる」「参加する」の3つを基本テーマに様々な活動を展開しています。建物は工芸作品を展示する展示棟、研修者が制作活動を行う工房棟、体験教室などを実施する市民工房棟に分かれており、すべて一般の見学者に開放されています。

市民が工芸と触れ合う場、機会を提供

1階エントランスから広がる展示室は、金沢の伝統工芸の礎を築いた加賀藩御細工所に関する資料をはじめ、九谷焼、加賀象嵌、漆器など金沢の伝統工芸作品を展示公開しています。2階では江戸後期の春日山窯、民山窯など卯辰山ゆかりの焼き物を紹介。このほか毎年テーマを決めた特別展も開催し、市民が工芸について理解と関心を深めるための場としています。
建物西側にある市民工房棟では、近年増加した余暇の有効活用と生涯学習への関心のニーズに応え、一般市民を対象とした各種工芸教室を開催しています。ここではロクロ教室、漆塗り教室、藍染絞り教室、吹きガラス教室など、スタッフや研修者が企画した多彩な教室を開催。多くの市民に創作の喜びや楽しさを味わってもらっています。

自由な制作風景が見られる5つの工房

建物の中央部分は技術研修者の制作工房。技術者の育成は同工芸工房の中心となる活動で、高度な工芸技術と優れた造形感覚を養うとともに、工芸振興に寄与する人材を育てています。ここには金沢の伝統工芸である陶芸、漆、染、金工に、現代のクラフトとして人気の高いガラスを加えた5つの工房があり、定員31名が2年または3年在籍し、制作活動を行っています。
この工房の特徴は、研修者が自主的に計画を立てて制作活動を行っているという点。カリキュラムとしては常駐の専門員のほか、地元の伝統工芸作家やクラフト作家、著名デザイナー、建築家などを講師に迎えた様々な講義が開講されていますが、単位取得や課題提出の義務はなく、あくまでも研修者の自主性が尊重されています。施設は希望があれば24時間使用が可能、研修者には金沢市から毎月10万円の助成金が給付されています。このように恵まれた制作環境は全国的にも珍しいため、欠員募集時は応募者が殺到。近年は韓国、アメリカ、スペインなど海外からの応募もあり、毎回、5〜20倍という狭き門となっています。

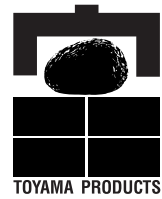
研修修了者の多くが金沢に根づく

研修者が制作した作品の発表の場は工房内の展示室や年1回の工房祭のほか、金沢市が運営しているギャラリー「広坂クラフト」、「里山クラフト」もあり、研修者は常に使い手の評価やニーズを聞き、制作活動に生かしていくということを実践しています。
また、研修修了者には制作活動を支援する施設として、ガラスと陶芸の貸し工房「牧山ガラス工房」、「おしがはら工房」が整備されており、いずれも90%以上という高い稼働率で利用されています。
このように在籍中はもちろん、修了後も工芸作家を積極的にバックアップする体制のおかげで、これまで同工芸工房を修了した148名のうち半数近くが金沢に残り、作家活動を続けています。
「後継者育成の事業としては全国でも珍しい成功例であり、地元の工芸振興に貢献していると思います。研修者たちは工房在籍中から地元作家と親交を深めたり、グループ展でネットワークを広げたりして金沢の街と密接につながっています。こうしたことも“このまま金沢で”という制作意欲を掻き立てるのだと思います」と館長補佐の相川繁隆さん。
金沢の工芸の強さは、長い歴史に育まれた伝統の技を継承しながらも、常に時代の価値観や生活に寄り添い、新しい流れを創り出しているという前向きな姿勢があるから。同工芸工房の活動は、そんな金沢のネオ・クラフトを生み出す原動力となっているようです。

優れた富山ブランドを全国へ発信！

―平成15年度　富山プロダクツに13点選定―

富山県総合デザインセンターでは、県内で企画・製造された工業商品で性能、品質およびデザイン性に優れたものを「富山プロダクツ」として選定し、製品の普及と販路拡大を支援しています。平成15年度の審査会はさる1月29日に実施し、13点を選定しました。選定品は3月19日から5月5日まで、富山県産業高度化センター展示室で発表・展示。今後、県内外の展示会などへの出展や販売促進、デザイン改良についても支援していきます。

審査風景

選定製品には「富山プロダクツ」のシールを貼付し、富山ブランドとして全国に発信していきます。マークのデザインはグラフィックデザイナーの彼谷雅光さん（富山市）。様々な可能性がある商品を「原石」にたとえ、その中から優れたものを選び出していく過程を、「富」の漢字のなかに原石を配置することで表現しています。具体的には「富」の文字の「田」は商品を検討するフィールド、上の「ウ」は評価されたものを選び出す人の手を表しています。

［選定委員］
委員長　黒木　靖夫（富山県総合デザインセンター所長）
副委員長　小松　研治（高岡短期大学産業造形学科教授）
委員　浅野　隆（金沢美術工芸大学製品デザイン助教授）
野田　雄一（富山ガラス工房技術部長）
末坂　幸子（高岡市デザイン・工芸センター所長）
八木　紘一（(社)富山県デザイン協会事務局長）
桐山登士樹（総合デザインセンターデザインディレクター）

LPG用FRP可搬容器 20kg型
㈱タカギセイコー／高岡市

オール樹脂製の耐圧タンク。
従来の金属タンクより軽量で、低コスト。

錫(Tin)シリーズ ぐい呑・小鉢（丸）・（三角）・（四角）
㈱能作／高岡市

酸化しにくく、水を浄化する特性がある錫。
高岡の伝統である鋳物の技術を生かした錫100%製品。

OLETTOドアシリーズ ワンツードアF型（フォールドリターン） 3枚折れ引き戸ドア（スリーフォールド）
オレットドア販売㈱／富山市

どちら側から押しても開けることが可能で、開閉スペースも小さいバリアフリーのドア。

トレー FUSHI-ZEN
下尾和彦（shimons）／八尾町

だまし絵のようなデザインでスタッキングできる一人膳。

グラス colore（コローレ）
下尾和彦（shimons）／八尾町

底の間に薄く色を加えたことで、
見る角度によって表情が様々に変化するグラス。

飾台 大・小
下尾さおり（shimons）／八尾町

タモ材の木目を生かしたシンプルな形の飾台。

ゴミステーション 美ingBOX(BB20-90B)
㈱グリーンテクノ富山／高岡市

廃木材や再生プラスチックを利用した再生木材による
水に強く腐らないゴミステーション。

真鍮製手洗い アクア ピサ
㈲ライル／高岡市

高岡の伝統的鋳物技術にモダンテイストを
アレンジした手洗いボール。

物干し竿掛け 楽・楽アーム（縦収納）NKA-50
㈱ナガエ／高岡市

集合住宅のバルコニースペースに取り付けられる物干し竿掛け。
アームを折り畳んで収納時の出幅を抑えることができる。

低反発ハニカムマット RBBマット
㈲アールビービープロジェクト／砺波市

冬は暖かく夏はムレないマット。耐圧分散に優れ、疲れない。
生地には備長炭が織り込まれている。

段ボール製容器 N-パック
ジャパンパック㈱／滑川市

金属缶にかわるダンボール製の気密保持容器。

インターフォンユニット（パネルタイプ）
北陸アルミニウム㈱営業企画推進部／高岡市

優れた施工性とシンプルで飽きのこないデザイン。
リサイクル性に優れたアルミを使用。

CDスタンド Birds-Foot
㈱竹中製作所／高岡市

三脚のような安定性のあるCDスタンド。
有機的かつ、幾何学的なフォルムが特徴。

IT Seminar Information

ITセミナーインフォメーション

3Dモデリング＆切削PR体験セミナー

2003年11月13日(木)〜14日(金)　富山県総合デザインセンタープレゼンテーションルーム
［講師］菅沼 和比古　モデリングアール㈱アプリケーションリーダー

デジタルカメラで入力した画像から、3Dモデリングソフトウェアの「Rhinoceros」を使って3Dデータを作成。また2日間に渡り、加工知識がない人でも扱いやすいソフトウェアの「CraftMiLL」でデータを加工し、3Dプロッターの「MDX-20/15」を使ってプリンター感覚での切削加工を体験しました。3次元データを有効活用することによって、設計者がオフィスにいながらにしてデザイン形状の確認試作や簡易型などの切削モデルをつくれる利便性を実感しました。

3次元ソリッドモデラー『SolidWorks2004』セミナー

2003年11月18日(火)〜19日(水)　富山県高度化センター会議室他
［講師］伊達 政秀　㈱シーキューブSolidWorks担当責任者

設計・製造分野だけでなく、プロダクトデザイナーも注目する3次元CAD「SolidWorks2004」は3次元ソリッドモデラーの最新バージョン。ソリッド／サーフェイスモデリング、アセンブリ、2次元図面の作成・解析など、多彩な機能を標準装備したミッドレンジCADとしての特長と操作説明を受けるとともに、デモンストレーションによる体験を通して、その有効性を実感しました。これまで機械系CADとして多用されてきたソフトウェアですが、デザイン分野での活用も期待できると興味津々でした。

thinkdesignセミナー

2003年12月5日(金)　富山県産業高度化センター研修室
［講師］松岡 孝幸／シンク・スリー㈱マネージャー　メジャーアカウント・デベロプメント担当
中村 智洋／シンク・スリー㈱テクニカルマネージャー　プロダクトスペシャリストグループ

あらゆる曲面を自由自在に変更できる3次元CADとして、モデリング、モデルの修正作業の大幅な省力化を実現した「thinkdesign」は、プロダクトデザイナーをはじめとした設計・製造に携わる人たち、なかでもプレス金型メーカーから抜群の評価を得ています。ここでは実際に、製品形状からスプリングバックを盛り込んだ形状への修正など、曲面修正能力（グローバルシェイプモデリング）機能についての説明を受け、デモンストレーションを体験。ぜひ実際の仕事で使いたいとの声が聞かれました。

night forum story

ナイトフォーラム
144回―148回

145回　2003年8月22日(金)

関 康子さん
㈲トライプラス代表取締役

「おもちゃ作りに見るスローデザイン」

関さんは『AXIS』編集長、アメリカ留学、フリーエディターなどを経て2001年、女性3名で子どもに良いデザインを提案する企画会社「トライプラス」を立ち上げました。この春、世界のおもちゃを紹介する「世界のおもちゃ100選」を出版。「『AXIS』を編集していた時は常に最先端のデザインを見ていて、おもちゃは視野にありませんでしたが、そこから離れ、おもちゃを作る人の思いや人生観に触れて深く感動しました。今ブームのスローフードが目指しているのは、消えつつある品質や技術を守ること、生産者を守ること、子どもに良いものを教え伝えること。これはおもちゃの世界も同じ。これからも親子で遊べるエデュケーショナル・トイやスローデザインの紹介、企画制作を続けていきたいと思います」と話されました。

147回　2003年12月16日(火)

板垣 真理子さん
写真家・エッセイスト

「キューバ　大西洋トライアングル」

ミュージシャンのフォトグラファーとして活躍していたある時、アフリカ音楽に惹かれてナイジェリアに旅立った板垣さん。その後はアフリカの奴隷文化や音楽が伝播したブラジル、キューバに通い、そこに暮らす人々の日常生活を記録し、写真集やエッセイを出版しています。キューバではブエナビスタ・ソシアルクラブのメンバーとも交流し、彼らのインタビュー本も出版。「キューバはノスタルジックな街並みとロマンティックな人々。いつも自然で、温かく、やさしいのです」とキューバの魅力を紹介されました。まだ渡航者の少ない赤道周辺の国々に単身で乗り込み、どっぷりと暮らしながらシャッターを切る板垣さん。素朴な自然や街角、生活を切り取った写真からは熱く、甘い風が漂ってきました。

144回　2003年5月20日(火)

桐山 登士樹
富山県総合デザインセンターデザインディレクター

「ミラノサローネ報告」

毎年春、イタリア・ミラノで開催される国際家具見本市「ミラノサローネ」を取材している桐山デザインディレクターが、今年のデザイン動向について報告しました。全体としては新作よりも、既存シリーズに新作をプラスするというリニューアルが増加。デザインの新しい方向性を示唆するものが少なく、混迷期という印象、ということでした。フォルムはオーガニックが主流。丸みのあるもの、有機曲線を多用したものが多く、色は白、黒が中心で、茶系、グレーのバリエーション、赤が目に付いたものの、昨年ほど鮮やかな色は少なかったそうです。ベテランデザイナーが活躍する一方、若手や学生の参加も増え「特にサテライト館は若手デザイナーがビジネスチャンスを得る登竜門として確立されたと言えるでしょう」と報告しました。

146回　2003年10月29日(水)

伊東 史子さん
デザインプロデューサー

「デザインとイタリア人気質と職人生活」

伊東さんは倉俣史朗氏の秘書、ソットサス社日本代理人などを経て、フィレンツェでジュエリーデザイナーとして活動。現在はイタリアデザイン界とのネットワークを生かし、プロデューサーやコンサルタントとして活躍しています。「イタリアでは、時間と愛とお金は似ているということを学びました。どれも保険が効かないし、持っていてもうまく使わないと意味がないもの。だから今、持っているものを最大限に使いきることが豊かに生きるコツだと思います」と話されました。イタリアと日本を行ったり来たり。おおらかなイタリア人気質と日本人の繊細なクリエイティビティ、両方のいいところをうまく生かしながらポジティブに生きる伊東さん。そのチャーミングな笑顔が印象的でした。

148回　2004年2月27日(金)

日高 一樹さん
弁理士／日高国際特許事務所所長

「クリエーターのための知的財産講座」

日高さんは元プロダクトデザイナー。デザイン経験を生かし現在、企業やデザイナーの特許や意匠権、知的財産権を守る弁理士として活躍しています。知的財産権が注目されたのはこの5〜6年。裁判に敗れると何億もの侵害賠償が求められる時代になっています。今後、日本のメーカーが勝ち残るにはデザインによるブランド力を確立していくことが必要。その過程で模倣から守るのが知的財産権です。日高さんは過去の訴訟事例を紹介しながら「商品を開発したら、どういう分野で、どう展開していくのか、時代を先読みして権利を守っていくことが大事。まずはブロックすること、次にその権利を活用して付加価値をつけて差別化すること、そして攻撃的に責めていくことが企業経営の重要なポイントになっています」と話されました。

富山のCreator展 →11

「富山のCREATOR展」は、当デザインセンターが、平成12年より富山県地域産業創出総合支援事業の一環として、富山県内のクリエーターに作品を発表する場を提供しているものです。今回は「グランドデザインを描いた郷土の先覚者たち」展をご紹介します。

【先覚者50人】
翁　久允
林　忠正
高峰　譲吉
嵯峨　寿安
馬場　はる
瀬木　博尚
正力　松太郎
金岡　又左衛門
山田　昌作
田中　冬二
瀧口　修造
太刀山峰右衛門
亜武巣マーガレット
室崎　琴月
山田　胖
田部　重治
谷口　節道
石黒　宗麿
高瀬　保
吉田　忠雄
安田　善次郎
中田　清兵衛
山田　孝雄
ヨハネス・デ・レーケ
高田　雪太郎
佐伯　宗義
大矢　四郎兵衛
本保　義太郎
中野　双山
福井　直秋
高階　哲夫
堀田　善衛
高沢　瑞信
水野　豊造
沼田　喜三郎
川端　元治
牧野　キク
稲垣　示
島田　孝之
米沢　紋三郎
大橋　十右衛門
金山　穆韶
梅原　眞隆
斉藤　弥九郎
江尻　豊治
中沖　太七郎
岩倉　規夫
岩城　庄之丈
川田　順
岩城　準太郎

越中人譚50人の肖像彫刻【高岡展】

「グランドデザインを描いた郷土の先覚者たち」展

2003年12月12日（金）～2004年2月3日（火）　富山県産業高度化センター展示室

楢原北悠さんが『越中人譚』に共鳴し、2年前から自発的に制作している「肖像彫刻・越中人譚の人々」を展示。『越中人譚』は、先人の功績という視点で「郷土再発見」を試みているチューリップテレビの文化事業のひとつで、出版や映像、インターネットで発信しており、現在は既刊65号をもって収蔵した人物は195名にのぼります。そのなかで楢原さんが制作した肖像彫刻は現在までに50作品となり、今後も制作を続けられるとのこと。肖像彫刻（胸像原型）が醸し出す魅力には、出版や映像で伝えるものとは違った感動があります。訪れた来場者は、郷土に偉大な業績を遺した50人の先覚者たちとの「無言の対話」を通して、富山の歴史に思いを馳せていました。

楢原　北悠　Narahara Hokuyuw
1953年北海道に生まれ、個展・公募展・グループ展で活動。'85年渡米・ニューヨーク。'87年インターナショナルアートコンペティションNY'87ゴールドメダル受賞。第14回現代日本彫刻展、第3回ロダン大賞展、フジサンケイビエンナーレ現代国際彫刻展、第22回現代日本美術展。'96年ヨコハマビエンナーレ'96入賞。'97年第3回大分アジア彫刻展優秀賞受賞。現在、高岡市在住。

EXHIBITION

椅子のディテール展

富山県立近代美術館コレクションより

2004年2月11日（水）～3月15日（月）　富山県産業高度化センター展示室

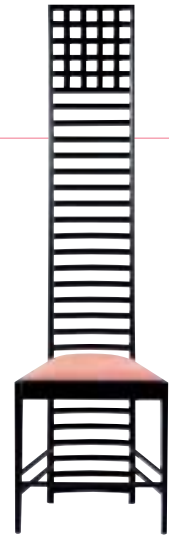
第7回　はじまりのモダンデザイン

「椅子のディテール」は、富山県立近代美術館と富山県総合デザインセンターとの協同により、近代美術館の椅子コレクションを様々な切り口から紹介する企画として、継続的に開催しているものです。これまで、様々な角度から椅子のデザインを紹介してきましたが、7回目を迎える今回は、「はじまりのモダンデザイン」と題して、20世紀初頭の椅子を紹介しました。世紀末のウィーンで活躍したヨーゼフ・ホフマン、直線的な面と線による大胆な造形が今なおお人をひきつけるリートフェルト、スチールパイプを用いた革新的な家具のデザインを打ち出したバウハウスとその周辺の建築家たち。このような、20世紀のデザインのパイオニアであるデザイナーや建築家による椅子は、半世紀以上を経た今もなおお多くのデザイナーたちに示唆を与え続けています。現代のデザインの出発点ともいえる時代に生まれた29脚の椅子と、そのデザイナーに焦点を当てるこの展示は、時代を超えても色あせないデザインについて思いを巡らせる機会となりました。

富山県立近代美術館学芸員　稲塚 展子

チャールズ・レニ・マッキントッシュ

イギリス　1868-1928

20世紀が始まったばかりの頃、マッキントッシュは、イギリス北部の工業都市グラスゴーにおいて独自のスタイルを花開かせた。垂直線を強調した幾何学的な造形と、その中に時折散りばめられた繊細な装飾文様は、独特の空間を生み出していた。彼の家具は、その建築空間での重要なディテールとしてデザインされた。いずれも室内空間で椅子の格子が装飾的な要素となっていた。それとともに、ティールームの給仕係の椅子「ウィロー1」では、大きな背もたれが衝立としての役割も果たしていた。

サイドチェア〈ヒルハウス1〉
1902

サイドチェア〈ウィロー1〉
1904

ヨーゼフ・フランツ・マリア・ホフマン

オーストリア　1870-1956

オットー・ヴァーグナーに師事したホフマンは、ウィーン工房を設立した建築家。この工房からは、熟練した職人たちとの緊密な共同作業により、例えばこの「ロッキングチェア」のような、水準の高い製品が送りだされた。角材を曲げた楕円のフレームが、デザインの大きな特徴である。その外側に付けられた鍵状の突起に棒を渡すことによって、背もたれと脚を乗せる部分の角度を調整することができる。そのデザインは、幾何学的な形態の組合せによって優雅な雰囲気をうみだすとともに、実用性を考えたものであった。

ロッキング・チェア
1905

ヴィラ・アストのためのアームチェア
1910

ネスト・テーブル
デザイン年不詳

写真提供：富山県立近代美術館
解説執筆：稲塚展子

フランク・ロイド・ライト
アメリカ　1867-1959

20世紀の建築におけるパイオニアの一人として知られるライトは、旧帝国ホテルの設計者として戦前の日本の建築界にも大きな足跡を残した。「ミッドウェイ1」は、その帝国ホテルのためのデザインである。19世紀末には既に日本の伝統的な建築に強い関心を寄せていた彼は、これに倣って内部の部屋を仕切らずに、途切れずに続く一つの空間として捉えようとした。その室内では、家具は建築と一体化すること、そして機械で効率的に生産できることを目指し、直線だけで巧みに構成されたデザインを打ち出した。

アームチェア〈タリアセン〉
1949

サイドチェア〈ミッドウェイ1〉
1914

サイドチェア〈ロビー〉
1905

オットー・ヴァーグナー
オーストリア　1841-1918

当初は歴史的な建築のスタイルを踏襲していたヴァーグナーは、1894年、ウィーンのアカデミーに招聘された頃から新しい時代に適したスタイルを意識し始める。その結晶と呼べるのが、1905－06年に設計した「ウィーンの郵便貯金局」である。その調度としてデザインされた椅子の高さは、並んだ椅子が建築の腰板のラインに調和し、空間に美しい水平線が描かれるようにと決められた。また、背もたれに穿たれた穴と脚の着地面とアームに施された金属は、補強としての役割も果たしている。

ウィーン郵便貯金局のためのアームチェア
1905

ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ
ドイツ　1886-1969

ミースは、1930年から33年の間、最後の校長としてバウハウスに関わった。彼の代表的な椅子のデザインの多くは、校長としてこの学校に関わる以前に発表されている。「ダイニング・チェア」の原型となった優雅な曲線のカンティレバー構造の椅子は、ミースがデザインした初めての鋼管の椅子であるが、その後の「バルセロナ・チェア」「ブルノチェア」では、鋼管ではなく鋳造や板状の金属を用いている。ブロイヤー、シュタムといった同時代の建築家のなかでも、彼はとりわけ金属のクールな質感に魅せられていたのではないだろうか。

バルセロナ・チェア
1929

アームチェア
1927

ブルノ・チェア
1930

ロベール・マレ=ステヴァン
フランス　1886-1945

マレ=ステヴァンは、その幾何学的なフォルムと合理的なデザインによって、フランスのインテリアの世界に新風を吹き込んだ存在。その活動は、前衛的な映画のセット、テーブルウエアのデザイン、建築雑誌の編集などと幅広い。彼は、マッキントッシュや、マレ=ステヴァンの叔父の邸宅を手がけていたヨーゼフ・ホフマンに強く惹かれていたという。この「ダイニングチェア」もまた、素材のスチールパイプが当時の家具デザインの様相を映し出している。しかし、スチールの輝きを黒く塗りこめて優雅なフォルムを際立たせることで、ホフマンらの椅子に通じる雰囲気を漂わせている。

ダイニングチェア
1928-30

ヴァルター・グロピウス
ドイツ　1883-1969

ドイツの造形学校バウハウスは、1919年の創立からナチスの台頭で1933年に閉鎖されるまで、多くの芸術家、建築家、デザイナーを送りだした。グロピウスはその創設を唱え、導き、そして初代校長となった建築家である。「ファグス靴型工場のための椅子」は、バウハウス誕生以前、未だ20代後半であった彼がアドルフ・マイヤーと共に設計事務所を開設して間もない頃の作品である。彼とマイヤーの設計によるその靴型工場は、細い鋼鉄のフレームに支えられたガラスのカーテンウォールを、驚くべきことに1911年という早い時期に打ち出したものだった。

ファーガス靴型工場のためのアームチェア
1911

ヘリット・トマス・リートフェルト
オランダ　1888-1964

アムステルダムに程近い街ユトレヒトで、家具職人として出発したリートフェルト。夜学で建築を学んだ後、自身の工房を開き、規格化された板や角材を用いた椅子のデザインを模索した。そして生まれたのが「レッド・アンド・ブルー」のまだ彩色されていない原型である。その十年以上後に生まれた「ジグザグ」は、継ぎ目のない板による椅子を目指した造形だ。建築でも斬新なデザインを打ち出しながらも、彼は素材と工法の可能性を模索し、自身の手から新しい椅子の造形をうみだす家具職人であり続けた。

シュローダー邸のためのサイドテーブル
1923

サイドチェア〈ジグザグ〉
1934

アームチェア〈レッド・アンド・ブルー〉
1918-23

マルト・シュタム
オランダ　1899-1986

後脚がない椅子の構造であるカンティレバーは、19世紀の半ばから何人もの建築家、家具職人、デザイナーが着想してきたものだ。1926年、継目のないスチールパイプを用いた軽量の椅子として、世界で初めてそれを実現したのが、オランダの建築家、シュタムである。バウハウスのブロイヤーは、その前年に鋼管を曲げた椅子「ワシリー・チェア」を発表したのち、シュタムと同じ頃に細部がわずかに違うカンティレバーの椅子「チェスカ」を発表している。しかし、カンティレバーに関しては、発表が早かったシュタムが考案者として認知された。

アームチェア〈S-64〉
1927

サイドチェア〈S-32〉
1927

ジュゼッペ・テッラーニ
イタリア　1904-1943

ミラノに程近い避暑地コモにうまれ、この地を拠点に活動した。ミラノ工科大学を卒業直後の23歳の時には、既に集合住宅の設計を行うなど、早くから注目を集め、イタリアの合理主義建築の旗手となった。その建築は、白い箱のようにシンプルな外観と、幾何学的な形態の組合せが織りなす、計算し尽くされた美しい空間を持つ。「サンテーリア」は、第二次大戦前夜の時代、ファシスト党の事務所として設計した代表作「カサ・デル・ファッショ」のための椅子である。その後、戦線に送られた彼は、惨禍を目にして精神を病み、コモに戻って間もなく39歳の若さで世を去る。建築家としてのキャリアは、わずか十数年であった。

アームチェア〈サンテーリア〉
1936

サイドチェア〈フォリア〉
1934

マルセル・ブロイヤー
ハンガリー　1902-1981

バウハウスで学んだブロイヤーは、1926年より同校の家具工房の主任を務めた。その傍ら、彼自身のプロジェクトから生まれた「ワシリー・チェア」は、スチールパイプを曲げて生まれた初めての椅子である。自転車のハンドルにヒントを得たこと、その名はバウハウスの教授だった画家ワシリー・カンディンスキーに由来することは、この椅子の有名なエピソードである。その後も、ブロイヤーは鋼管の家具のパイオニアとして、数多くの優れたデザインを残している。「ワシリー·チェア」の製造は、曲木の椅子で有名なトーネット社が手がけた。

トーネット・ラウンジチェア〈B35〉
1927

ワシリー・チェア
1926-28

トーネット・アームチェア〈チェスカ〉〈B64〉
1928

アイリーン・グレイ
アイルランド　1879-1976

コルビュジエが活躍した20年代のパリで、女流インテリア・デザイナーとして活躍していたグレイ。世紀末の華やかな空気に憧れて渡ったパリで室内装飾を学び、1910年代から、顧客や親しい友人のために家具やインテリアを手がけた。初期は、日本人の職人に手ほどきを受けて、漆の衝立などを制作していた。「トランザット」は建築を志向しはじめた1920年代後半の作品だが、そのフレームに施された黒い塗装には、漆への愛着が感じられる。全体の構造や座る姿勢に従って動く椅子の背もたれの部分には、同時期のコルビュジエらの椅子からの影響が見られる。

アームチェア〈トランザット〉
1927-30

ジャン・プルーヴェ
フランス　1901-1984

プルーヴェは、コルビュジエをはじめとする20年代に活躍した一群のフランスの建築家たちのなかでも、技術者としての性格が強い存在だ。彼のデザインは、当時の最新の技術や素材に取り組み、合理的で美しい建築構造を追求することから生まれた。1920年代に彼が打ち出したのは、規格化された軽量の金属部材による建築構造。そのパーツの製造には、当時の自動車製造の技術が応用された。建築で彼が打ち出した合理性は、サイドチェアにも応用されている。少数の金属板と合板の部材で構成され、製造と運搬の効率が良いうえ、損傷すれば部材の取り替えで補修できる。

サイドチェア〈B31〉
1931

ル・コルビュジエ（シャルル・エドゥアール・ジャンヌレ）
スイス　1887-1965

ピエール・ジャンヌレ
スイス　1896-1967

シャルロット・ペリアン
フランス　1903-1999

近代建築の父、その一人として数えられるル・コルビュジエ。その彼の家具デザインの協力者として現れたのが、学校を出たばかりのペリアンであり1927年、コルビュジエの片腕で従兄弟のジャンヌレを加えた3人によって一連の椅子が生まれた。「建築は住むための機械」とはコルビュジエの言葉。建築が、人の生活の要請に機械のように従うということだ。座る角度が自在に変わる椅子は、まさにその理念を椅子で実現している。

アームチェア〈LC-1〉〈スリングチェア〉
1928

寝椅子〈LC-4〉
1928

アームチェア〈LC-2〉〈グラン·コンフォール〉
1928

事業名	名称・日時	内　容	摘　要	場　所
1.デザイン開発支援事業	商品開発研究会 2003.6.24	・商品開発研究会の活動について＜分科会の設立／開発テーマの設定＞ ・年間運営計画について		富山県総合デザインセンター プレゼンテーションルーム
	7.16	デザインウエーブ「富山プロダクトデザインコンペティション2003」第一次審査会作品観照		富山県産業高度化センター展示室
	10.22	「モデラー暦50年、私のモノづくり、家具づくり」	講師:宮本茂紀（㈱ミネルバ代表取締役）	富山県総合デザインセンター プレゼンテーションルーム
	12.17	「アッシュ・コンセプトの商品開発とマーチャンダイジング」	講師:名児耶秀美（h-concept代表取締役）	〃
	2004.3.11	「集合住宅と空間コーディネーション」	講師:鈴木エドワード（鈴木エドワード建築設計事務所㈱代表） 高橋百合子（㈱オフィスオクト代表取締役）	〃
	製品開発	富山プロダクトデザインコンペティション及び富山・ミラノデザインコンペティションの入賞作品試作、商品化検討。		
2.市場開拓・流通支援事業	市場開拓・流通支援 2003.5.13〜5.30	富山プロダクツ選定商品15点の展示販売を行った。		「いきいき富山館」東京・有楽町駅前/東京交通会館内
	9.2〜9.5	日本最大のパーソナルギフトと生活雑貨の国際見本市「第56回東京インターナショナルギフト・ショー2003」に富山プロダクツをはじめ、県内商品を出展し、国内外のバイヤーなどに対してのプレゼンテーションを行った。		東京ビッグサイト
	富山ブランド選定 2003.11.14〜 2004.1.16 1.29	県内で企画、製造される性能、品質及びデザイン性に優れた工業製品の認定制度「富山プロダクツ選定商品」の公募 県内企業からの公募商品を選定委員会により、富山プロダクツ商品の選定を行った。	選定委員　委員長:黒木靖夫（富山県総合デザインセンター所長）、副委員長:小松研治（高岡短期大学産業造形学科教授）、委員:浅野隆（金沢美術工芸大学製品デザイン助教授）、野田雄一（富山ガラス工房技術部長）、末坂幸子（高岡市デザイン・工芸センター所長）、八木紘一（㈳富山県デザイン協会常務理事・事務局長）、桐山登士樹（総合デザインセンターデザインディレクター）	富山県産業高度化センター展示室
3.デザイン人材育成事業	ITモノづくり研修 2003.5.6〜5.8 ／5.13〜5.14	Mastercamによる3次元CAD/CAM技術講習会	講師:水嶋直司（㈱ジェービーエム技術情報部）	富山県総合デザインセンター プレゼンテーションルーム
	9.10〜9.12	ITデザインセミナー（ホームページ作成コース）	講師:宝里均（㈲サイバースクエア代表取締役） 主催:㈳富山県デザイン協会・富山職業開発促進センター	富山職業開発促進センター （ポリテクセンター富山）
	10.28〜10.30	ITデザインセミナー（グラフィックデザインコース）	〃	〃
	11.13〜11.14	3Dモデリング&切削RP体験セミナー	講師:菅沼和比古（モデリングアール㈱アプリケーションリーダー）	富山県総合デザインセンター プレゼンテーションルーム
	11.18〜11.19	3次元ソリッドモデラー『SolidWorks2004』セミナー	講師:伊達政秀（㈱シーキューブSolidWorks担当責任者）	富山県産業高度化センター会議室 富山県総合デザインセンター プレゼンテーションルーム
	12.5	thinkdesignセミナー	講師:松岡孝幸（シンク・スリー㈱マネージャーアカウント・デベロプメント担当） 中村智洋（シンク・スリー㈱テクニカルマネージャープロダクトスペシャリストグループ） 主催:㈱シーキューブ	富山県産業高度化センター研修室
	2004.2.4〜2.6	ITデザインセミナー（画像処理コース）	講師:宝里均（㈲サイバースクエア代表取締役） 主催:㈳富山県デザイン協会・富山職業開発促進センター	富山職業開発促進センター （ポリテクセンター富山）
	2.9〜2.11	thinkdesignによる3次元CAD技術講習会	講師:大滝昌子（㈱シーキューブ技術サポートグループ員） 横山忍（㈱シーキューブ技術サポートグループ員） 共催:㈱富山県産業高度化センター・㈲福宮	富山県産業高度化センター研修室
	3.29	カラーマネジメントの基本とCMSソフトウェアによる実践	講師:冨川丈司（㈱エックスライト・アジア・パシフィック・リミテッドセールス・マーケティング・マネージャー）	富山県産業高度化センター会議室
	デザイン講習会 2003.5.28	「ブランドエクスペリエンス&エクスペリエンスデザイン」 「ライフデザインを考えた住宅開発〜間取りよりも大切なこと」	講師:岡本慶一（東京富士大学経営学部教授） 講師:小澤優夏（住宅プランナー&コーディネーター）	富山県産業高度化センター会議室
	6.24	「ブランドとマーケティング・インフラ」 「大手マンションメーカーのマンションデザインの実態と分析」	講師:山下裕子（一橋大学大学院商学研究科助教授） 講師:河辺哲雄（建築家・河辺哲雄設計室一級建築士事務所主宰）	〃
	7.15	「消費の現場、新しく作る消費の中で、どう“作らない”で作っていくか」	講師:ナガオカケンメイ（D&DEPARTMENT PROJECT代表プロデューサー）	富山県産業高度化センター展示室
	2004.2.4	「企業を成功に導くデザイン」	講師:深澤直人（Naoto Fukasawa Design代表）	〃
4.デザイン交流支援事業	第144回ナイトフォーラム 2003.5.20	「ミラノサローネ2003報告」	講師:桐山登士樹（総合デザインセンターデザインディレクター）	富山市民プラザ2F 「Café de PAPA」
	第145回ナイトフォーラム 2003.8.22	「おもちゃ作りにみるスローデザイン」	講師:関康子（㈲トライプラス代表取締役）	㈱アキデザイン2F「アルファ」
	第146回ナイトフォーラム 2003.10.29	「デザインとイタリア人気質と職人生活」	講師:伊東史子（デザインプロデューサー）	富山市民プラザ2F 「Café de PAPA」
	第147回ナイトフォーラム 2003.12.16	「キューバ　大西洋トライアングル」	講師:板垣真理子（写真家・エッセイスト）	㈱アキデザイン2F「アルファ」
・共催事業	「デザイン探訪in山町筋」 2004.2.8	〜「家」と「物」から見る高岡の町衆文化〜 国重要伝統的建造物群保存地区に指定されている高岡市山町筋の住宅を見学。	講師:上野幸夫（富山国際職藝学院教授） 主催:㈳富山県デザイン協会	高岡市山町筋 「室崎家」「太田家」「大野屋」
	第148回ナイトフォーラム 2004.2.27	「クリエーターのための知的財産権」	講師:日高一樹（弁理士／日高国際特許事務所所長）	富山市民プラザ 「AVスタジオ」／「VAN VAN」
	デザインウエーブ 2003イン富山	富山プロダクトデザインコンペティション2003イン富山 課題1「プレゼントグッズ」（あげても、もらってもうれしいグッズ） 課題2「マンションの収納」 デザインウェーブ開催委員会開催 富山プロダクトデザインコンペティション2003応募要項を作成し、Web上又は郵送にて全国に公募。		
	2003.7.16	○第一次審査会	審査員:西山浩平（エレファントデザイン㈱代表取締役）、関康子（㈲トライプラス代表取締役）、黒木靖夫（総合デザインセンター所長）	富山県産業高度化センター展示室
	8.22	○第二次審査会	審査員:近藤康夫（近藤康夫デザイン事務所代表）、西山浩平（エレファントデザイン㈱代表取締役）、関康子（㈲トライプラス代表取締役）、佐藤康三（㈱コーゾーデザインスタジオ代表取締役）、黒木靖夫（総合デザインセンター所長）	〃
	8.21〜8.23	○ワークショップ ガラスとメタルによるプロダクトデザイン	アドバイザー:近藤康夫（近藤康夫デザイン事務所代表） 佐藤康三（㈱コーゾーデザインスタジオ代表取締役）	富山ガラス工房、高岡市デザイン・工芸センター、富山県総合デザインセンター
	10.9〜10.26	○「デザインウエーブ2003イン富山」東京展 富山プロダクトデザインコンペティション2003の入賞作品のプロトタイプモデルやワークショップ作品などをデザイナーズブロックの期間に併せて東京にて展示		世田谷文化生活情報センター 情報プラザギャラリー
	11.5〜11.16	○富山プロダクトデザインコンペティション2003 Exhibition 富山ブランドを創出することを目的に、全国から公募したプロダクトデザイン一次通過作品及び招待デザイナー作品25点を展示。		富山県産業高度化センター展示室
	〃	○イタリアデザインの地層　二大企業の戦略展		〃
	〃	○世田谷の集合住宅〜ARCHITECT'S APARTMENT展 東京世田谷区に造られた集合住宅11例を取り上げ、地域・環境・家族・近隣・安全といった様々な制約のなかで、どんな集合住宅が造られているのかについての展示		〃
	2003.11.5〜11.16	○ワークショップ作品展（ガラスとメタルのプロダクト） 富山県の主要産業であるアルミとこれからのデザイン分野に多用されるガラスを用いた新たなプロダクツ8アイテムを展示		富山県産業高度化センター展示室
	〃	○富山・ミラノデザインコンペティション作品展 JETROのLL事業（ローカルトゥローカル産業交流事業）で行ったミラノデザインコンペの応募作品パネルを展示		〃
	〃	○伝統産業から生まれた新しいデザイン 銅器・漆器・木工等、県内伝統技術をベースとしたジャンルから今のライフスタイルにあった作品の展示		〃
	11.5	○デザインセミナー 「イタリアカッペリーニ社　その成長の背景」 イタリアデザイン界を牽引する存在になったカッペリーニ社のデザイン戦略について 「今の時代に求められるデザイン」 デザインコンペの審査員による、現在のデザインの潮流について	講師:マルコ・ジラ（カッペリーニ社マネージングディレクター研究開発部門担当） 講師:黒崎輝男（㈱IDÉE代表取締役）、近藤康夫（近藤康夫デザイン事務所代表）、西山浩平（エレファントデザイン㈱代表取締役）、関康子（㈲トライプラス代表取締役）、佐藤康三（㈱コーゾーデザインスタジオ代表取締役）、黒木靖夫（総合デザインセンター所長） 進行:桐山登士樹（総合デザインセンターデザインディレクター）	ホテルニューオータニ高岡
	11.6	○デザインツアー 全国各地からデザインウエーブに参加したデザイナーを対象に、県内各地の企業のものづくり現場を見学し、様々な加工技術や素材のもつ特性を新たなデザイン提案に活用できることを目的にデザインツアーを実施		富山ガラス工房、桂樹舎、高岡テクノドーム（伝統的工芸品全国大会）、富山県産業高度化センター
・協賛事業	工芸都市高岡2003 クラフトコンペ 2003.10.23〜10.28	新しいクラフトを求めて	主催:工芸都市高岡2003クラフトコンペ実行委員会	大和高岡店
〃	第43回富山県デザイン展 2003.12.12〜12.14	「ユーモア〜心を豊かにするデザイン〜」をテーマに、県内公募参加者がグループごとにオリジナル作品を制作。柔軟な発想のユーモア溢れるワークショップの作品を展示。	主催:㈳富山県デザイン協会	イオンホール（イオン高岡）
〃	富山デザインフェア2003 2003.10.2〜10.5	TOYAMA ADC展、日本パッケージデザイン展2003とやま　ほか	主催:富山デザインフェア実行委員会	富山市民プラザアトリウム、ギャラリー、AVスタジオ
〃	第29回デザインセミナー 2003.6.24	榎本文夫が見るイタリアの商品開発力とその実践	講師:榎本文夫（デザイナー・駒沢女子大学空間造形学科教授） 主催:高岡デザインセミナー開催委員会	富山県産業高度化センター研修室
5.デザイン情報発信事業	機関誌の発行 2003.10／2004.3	offer22号/offer23号　平成15年度事業報告		
	インターネット情報発信	・ナイトフォーラム、デザイン講習会、デザインウエーブなどの開催情報やクリエーター及びデザインライブラリーのデータベースをホームページに随時掲載		
	富山プロダクツ2003東京展 2003.5.13〜5.30	富山県内で企画、製造される性能、品質及びデザイン性に優れた工業製品を「富山プロダクツ選定商品」として平成14年度に認定した15点を展示紹介。		いきいき富山館 （東京交通会館B1F）
	富山のCreator展→9 2003.6.3〜6.26	「JAGDA TOYAMA POSTER DESIGN EXHIBITION 2003 GREEN vol.8」 富山県内のグラフィックデザイナーが環境をテーマに制作したポスターを展示。		富山県産業高度化センター展示室
	サンセンター共同企画展 クラフトマンズギャザリング! 2003.7.19〜7.27	富山県内で活躍中のクラフトマン17人が大集合。金属、漆、木工、ガラス、陶磁器、アクセサリーなど様々なジャンルのクラフトを展示。	主催:サン・センター（高岡市デザイン・工芸センター、㈱富山県産業高度化センター、富山県総合デザインセンター）	富山県産業高度化センター展示室
	富山のCreator展→10 2003.8.9〜8.30	富山ガラス工房新人スタッフ展「不透明なガラス」 富山ガラス工房の新人スタッフ3名の作品展。		富山県産業高度化センター展示室
	第56回東京インターナショナルギフト・ショー2003出展 2003.9.2〜9.5	富山プロダクト選定商品などを展示し、全国へ富山ブランドを発信。		東京ビッグサイト （東京国際展示場）
	富山のCreator展→11 越中人譚50人の肖像彫刻高岡展 2003.12.12〜 2004.2.3	「グランドデザインを描いた郷土の先覚者たち」展 富山県出身または、本県との関わりが深く、輝かしい功績を残した人々の人物誌である「越中人譚」に掲載された50人の肖像を高岡市在住の彫刻家・楢原北悠氏が制作		富山県産業高度化センター展示室
	椅子のディテール展 2004.2.11〜3.15	富山県立近代美術館コレクションの椅子を29点展示。「はじまりのモダンデザイン」と題して20世紀初頭の椅子を紹介。	協力:富山県立近代美術館	富山県産業高度化センター展示室
	第38回富山計測展 3.18〜3.19	平成14、15年度富山プロダクツ選定商品及びデザインウエーブ、ユニバーサルデザインコンテスト等で商品化された商品を展示紹介。	主催:富山県、富山市、㈳富山県計量協会	富山産業展示館（テクノホール）
	富山プロダクツ展 3.19〜5.5	平成15年度富山プロダクツとして選定された、富山県内で企画・製造される性能、品質及び優れたデザインの工業製品13点を展示。		富山県産業高度化センター展示室
6.ユニバーサルデザイン推進事業	デザインフォーラム 2003.10.4	「北欧と北陸に受けつがれるクラフトマンシップ」	コーディネータ:佐藤康三（プロダクトデザイナー） パネリスト:高橋百合子（㈱オフィスオクト代表取締役）、安藤五十治（花ぬりデザイン事務所取締役）、小松研治（高岡短期大学産業造形学科教授）	富山県産業高度化センター研修室
	2004.2.25	「コクヨにおけるユニバーサルデザイン」	講師:竹綱章浩（コクヨ㈱CS推進センター長）	富山県産業高度化センター会議室
	デザインコンペ 公募期間 2004.1.19〜1.28 審査会　2.25	生活の中の不便を解決するアイデアをジャパンデザインネットWeb上にて公募 日常生活の様々な場面で感じる不便さを解決するユニバーサルデザイン ・エコロジーに配慮したユニバーサルデザイン ・雨または雪に関するユニバーサルデザイン	審査員:黒木靖夫（総合デザインセンター所長）、桐山登士樹（総合デザインセンターデザインディレクター）	富山県総合デザインセンター プレゼンテーションルーム
7.その他	ミラノデザインミッション視察 2003.10.2〜10.10	富山県内中小企業に対する産業振興策として、イタリアのデザインを活用した付加価値の高い商品開発を目的に、デザインの中心地であるミラノのデザイナー等との交流を図り、県内企業のものづくり技術を融合した新たなコラボレーション商品を創出する足がかりを築くため、優れたデザイン商品を数多く生み出しているイタリアの中小企業の現場を視察するデザインミッションを派遣した。	団長:大原隆司（富山県理事商工労働部次長）団員:鍛治浩光（㈱リッチェル商品企画部）、斉藤真里子（フローラ・ミュー代表取締役）、佐野雅子（エミリア代表）、下田彰（㈱リッチェル商品開発本部設計課長）、高田博（㈱タカタレムノス代表取締役社長）、高橋浩一（㈱池田模範堂OTCマーケティングチーム係長）、長岡隆志（タクミインターナショナル㈱代表取締役）、堀田裕二（㈱リッチェル商品企画部環境・オフィス用品課長）、八木紘一（㈳富山県デザイン協会常務理事）、山下澄男（㈱富山県産業高度化センター技術参与）事務局:桐山登士樹（総合デザインセンターデザインディレクター）、竹浦広紀（日本貿易振興機構富山貿易情報センター係長）、窪英明（総合デザインセンター主任研究員）	・YCAMI社 ・TRE-P&TPE-PIU'社 ・Kartel museo ・CERSAIE2003 ほか
	報告会　10.22	デザインミッションの報告会及び交流会		創作料理・WAZA（オークスカナルパークホテル富山内）
	富山・ミラノデザインコンペティション2003審査会 10.22	JETROのLL事業（ローカルトゥローカル産業交流事業）で行ったミラノデザインコンペの応募作品を審査	審査員:宮本茂紀（㈱ミネルバ代表取締役）、黒木靖夫（総合デザインセンター所長）	富山県総合デザインセンター プレゼンテーションルーム
	デザイン交流協定締結先調査 2004.2.16〜2.23	ミラノ在住デザイナーとの設計協議のほか、イタリアのデザイン関係団体とのデザイン交流協定に向けての協定候補団体の活動状況や協定の可能性を調査。	派遣員:堂本拓哉（総合デザインセンター研究員）	・蓮池槇郎デザイン事務所 ・Loop Design Center（ボローニャ所在の民間のデザインセンター） ・PROMOS（ミラノ商工会議所の特別法人）ほか